

一般社団法人 北海道地域農業研究所

会 報

地域と農業

第 124 号

Jan. 2022

Winter

**特 集 日本の中の北海道農業と農協 第4回
北海道内の農業金融の特徴と展望
-「開発型」農協のゆくえ -**

**レポート 持続可能な農村集落の維持・向上と
新たな産業振興に向けた対策手法の確立**



エーコープ
くみあい 高度化成肥料

くみあい 粒状配合(BB)肥料



稔りある大地とともに
ホクレン肥料株式会社

代表取締役社長 関野 哲正

札幌市中央区北4条西1丁目1番地（北農ビル18F）

T E L 代表 (011)222-2444
F A X (011)232-3597



北海道農業・農村と歩み続ける

ニューカントリー

農政や社会の動きを的確にとらえた「潮流」、経営管理や技術を総合的に検証する「技術特集」で、経営発展・地域活性化に役立つ情報を提供します。

また、元気に活躍する農業者やグループ、若き農業担い手を豊富なカラー写真とともに紹介。営農や生活に直結した企画やコラムも好評連載中です。

- 平常号 943円(税込) 送料154円
- 新年号 1,205円(税込) 送料205円
- 夏増刊号 1,466円(税込) 送料134円
- 秋増刊号 3,981円(税込) 送料205円
- 年間購読料 19,263円(税込)(増刊・送料込)

一図書のお申し込みは下記へ

デーリィマン社
株式会社 北海道協同組合通信社

※ホームページからも雑誌・書籍の注文が可能です。<http://dairyman.aispr.jp/>

☎ 011(209)1003

FAX 011(271)5515

e-mail kanri @ dairyman.co.jp

地域と農業 Vol.124



表紙写真：ランタンフェスタ
写真提供：新篠津村役場

目 次

- 2 観 察 時間どろぼうの話**
一般社団法人 北海道地域農業研究所 所長 坂下 明彦
- 7 特 集 日本の中の北海道農業と農協 第4回**
北海道内の農業金融の特徴と展望
—「開発型」農協のゆくえ—
一般社団法人 農業開発研修センター 客員研究員
(新潟大学名誉教授) 青柳 齊
- 15 レポート 持続可能な農村集落の維持・向上と**
新たな産業振興に向けた対策手法の確立
～道総研・戦略研究／地域Ⅱ～
(地独)北海道立総合研究機構 北方建築総合研究所 研究主幹 牛島 健
- 23 研究報告 地産地消延長型マーケティング論序説**
北海道大学大学院農学研究院 教授 坂爪 浩史
- 28 シリーズ いきいき農業高校 第15回**
北海道新十津川農業高等学校
- 35 Essay 収穫・仕込みを終え、残るは剪定** 登醸造 小西 淳子
- 39 研究所だより モニター会議概要**
- 54 連 載 わがマチの自慢 №.27 新篠津村**
一般社団法人 北海道地域農業研究所 特別研究員 三津橋真一
- 62 地域農研NOW コロナ第5波の収束後**
現地調査を精力的に実施中
- 67 DATA FILE**

※最終ページの「読者アンケート」にご協力願います。

ニヒヤエル・ハノヒの『モモ』がちよつとしたブームになつてゐるところ(註一)。

札幌駅前の紀伊國屋書店一階左奥に子供のコーナーがある。歳の離れた子供がいるので、時々若波少年文庫を探しに行

く。何年か前、モモなんていうちよつと

変わった名前の本を手に取った。一九七三年にドイツで出版されたファンタジーと書いてあり、私も娘もどっこいになった。でもちよっと難しいと娘。最近またまたNHKの衛星放送をみていたり、ポストで書かれていた(注2)。論者は流行りの経済

思想家の斎藤幸平のほか、独立研究者の山口周、医療人類学の磯野真穂である。みんな変わった肩書きだ。キーワードはもちろん、「時間」。この本のあらすじは、「んな感じ」である。

モモはイタリアらしい国の街はずれにある円形劇場の廃墟に住み着いた、昔で言えば浮浪児。彼女は天真爛漫で、「施設」なんかは大嫌い。気ままな生活を送っている。あの子はなんだろうと白い田を見ていた近所の大人や子供たちは、モモの不思議な力に魅せられ、集まってくれる

ようになる。彼女は誰の話もじーと聞いてくれ、聞いた方が自分で納得し、その時間が楽しくなつてしまつからだ。ところが、なぜか周りの大人たちは時間を廻にする生活をおくるよつになる。そつ、灰色の男たち、時間どひほつの陰謀が始まつたのである。彼らは灰色の長いコートに山高帽をかぶり、アタッシュケースを持ち、いつも葉巻をふかしている。モモはその陰謀に気つき、子供たちとトトをするが、時間泥棒たちに目を付けられ追い回される。そこに現れたのが、一匹のカメ カシオペイア。このカメが時間が司る神様 ホラの下へとモモを導く。そこでモモは莊厳な「時間の源」を見せられる。この時間の国から戻ったモモは、

時間どりばいの話

みる
観察

法人 北海道地域農業研究所

たちの手中にあることを知る。再び時間の国へ導かれたモモは男たちに包囲されるが、マイスター・ホラの意表を突く作戦

を一人で実行する。男たちが吸っていた

葉巻は人間から盗み取った時間の花でできており、それを失った男たちは海の藻屑のように消えていった。「うしてみんなに「時間」が戻ってくる。大人たちはせかせかした生活をやめて時間を楽しむようになり、子供たちも塾から開放されて天真爛漫さを取り返すのである。

一言でいって、時間泥棒とは誰だ！というのがこの「寓話」の強烈なインパクトである。そして、コロナ禍を契機にわれわれはこれまでのせかせかした生活を見つめ直し、新しい生活のあり方を考えるべきだ、というのが本をめぐつての三人の論者の共通した主張であった。なぜなら、われわれはコロナによって生活空間を奪われ、閉じ込められたあり余る時間の中でこれまでの強制された時間の過ごし方を反省せざるを得なかつたからで

ある。

ポストコロナを考える場合、生活空間と生活時間、そこでの人間活動のあり方が問題となるが、「」ではモモにあやかって時間について考えてみたい。といっても私は思想家でも哲学者でもないので、統計を読み解くことにする。材料は総務省の『労働力調査』である。^(注3)^(注4)。

この統計の対象とする期間はオイルショック前の一九六八年から六〇年間である。内容はきわめてシンプルであり、図1に示したように、就業者数、週当たりの平均就業時間、この両者の積である延週当たり就業時間の累年統計である。この図を見る前提として、図2で就業者数の動向を見ておこう。この統計は一九五三年からとなるが、就業者数は一九五五年で四、〇〇〇万人、一九六〇年代末で五、〇〇〇万人、一九八〇年代末で六、〇〇〇万人、そして一九九〇年代中頃にピー

クの六、五〇〇万人となる。その後は足踏みである。戦後すぐの就業者はまだまだ自営業とその家族が多く、農業就業者は一九五〇年代初頭の一、五〇〇万人から一九七〇年には八〇〇万人にまで半減するが、都市部の町工場や小商いなどの自営業者・家族は八〇〇万人から増加を見せ、一九七〇年代末には一、〇〇〇万人を超える。とはいって、その後は両者ともに減少を続けていく。これに対し、雇用者（サラリーマン、一部役員）が五〇%を超えるのは一九五八年であり、七〇%を超えてサラリーマン社会となるのはオイルショック後の一九七五年である。このころから団地住まいが一般化して、専業主婦が増える。が、就業者の男性比率はこの時期に増えはせず、当初の七二%から一九七〇年代半ばには六八%、一九八〇年代末には六〇%を割り、現在は五五%まで減少している。逆に言えば女

性比率が一貫して増加し、現在は四五%になってしまい。ロングスパンで見ると、当たり前と思っているサラリーマン社会の成立はそういうものではない。自営業

の労働力が外部化・商品化されたわけである。

このように、就業者数はほぼ頭打ちになり、男性の就業人口は二二二〇〇万人

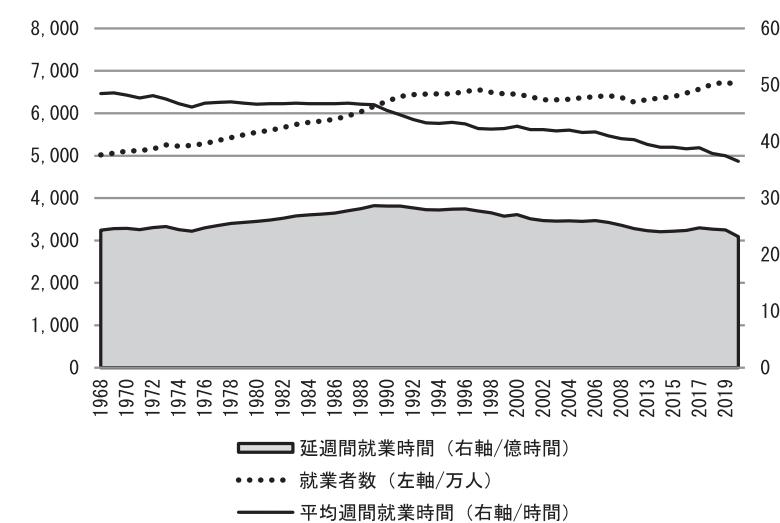


図1 延週間就業時間の動向（全産業）

注1) 総務省『労働力調査』基本集計・全国・年度次、累年統計により作成。
2) 1999年以前は延時間がないので、週平均時間に就業者数を乗じて計算した。
3) 2010~12年は東日本震災の影響でデータなし。

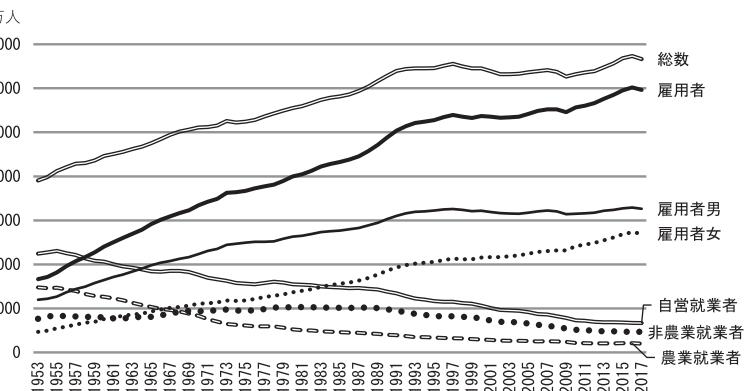


図2 全国への就業者数の変化

注)『労働力調査』基本集計・全国・年度次・累年統計・表1-1-2より作成。

は減少に転じる。一九六〇年代末の週当たり一四億時間から一九九〇年まで増加していたが、この一九九〇年をピークに一九九〇年には三億時間にまで一〇%

で前後している。これ

に対し、減少しているのが一人当たり平均就業時間である。一九六八年には週四九時間であったが、一九七〇年代半ばから一九八〇年代には週四七時間となり、一九九〇年から一九九〇年代にかけて週四二時間まで低下する。図1の就業者数と週労働時間の線は一九九〇年ころにクロスしておらず、両者の積である延べ就業時間（面積の部分）

も減少している。これは日本経済の活力が失われた三〇年間にに対応している。

話はずれたが、週の平均労働時間の減

少は、労働政策の動きに対応している。

労働基準法の改正で一九八七年には法定

週労働時間が四八時間から四〇時間へと

改訂され、一九九三年には完全実施され

ることになる。決定的だったのは、学校

への週休一日の導入であり、一九九一年

に月一回、九五年に一回、一〇〇一年に

完全週休一日となり、土日休みが社会化

される。しかし一〇一三年には就業時

間は週四〇時間を割り、これは現在まで

下がり続けており、一〇一〇年は三六・

五時間である。しかし週当たりの労働

時間の傾向的低下は福祉国家的な施策と

結びついており、「余暇」という言葉が

生まれ、狭義の生活時間の充実へと向か

うかに見えた。

しかし、新自由主義的な経済政策のも

とで労働政策は狙い撃ちにあう。その結果が格差社会の出現であり、一九七〇年代半ばに成立した生涯雇用、年功序列型賃金体制は崩れ去り、就業時間の短縮からその確保へと「時間」の位置づけが大きく変更されてしまった。ポピュリズムぶんぶんの「働き方改革」という政策もあきれるばかりである。労働時間の見直しも前途多難である。

もう一つ、生活空間にかかわって、最近発表された一〇一〇年の国勢調査結果がやや衝撃的だったので、紹介しておこう。世帯数の動きである。一般世帯数は一〇〇〇〇年の四、七〇〇万世帯から一〇一五年には五、三〇〇万世帯へ、さらに一〇一〇年には五、六〇〇万世帯にまで増加してしまる。一〇一五年からの増加は一人世帯と二人世帯のみであり、しかも一人世帯は一、一〇〇万世帯と人数規模別世帯でトップであり、全体の三八%を

占めている。家族ではなく、独り住まいの世帯が増加しているのである。六五歳以上の独居高齢者が多数と考えられながら、実は六七〇万世帯、三三%に過ぎず、四〇歳未満が六一〇万世帯、一九%、四〇歳から六四歳が六〇〇万世帯、二八%であり、一人住まい世帯は今やすべての年代で増加しているのである(注5)。

しはかなり遠く見える。少し触れた生活

空間の重要な単位である家族も一人世帯の増加で空洞化しつつある。豊かさの追求はなかなか難しい。

ただし、社会が確実に変化していることも事実であり、ワークシェアリングや生活本位のライフスタイルなど変わるとこれは確実に変わっている。当研究所では、自主研究として「コロナ禍を契機とした新しい生活様式の構築－農村からの提言」を開始している。研究の枠組みもできつつあるが、すでに紙幅も超過しているのでまたの機会に紹介したい。

紀伊国屋書店では、岩波ジュニア新書は一階の子供コーナーから一階に移され、大人の新書顔負けの存在感となっている。岩波少年文庫もたまには手に取って、子供のころのワクワク・ドキドキの冒険心と素直な正義感を取り戻したいものである。

注

(1) ミヒヤエル・エン『モモ』岩波少年文庫¹²⁷、一〇〇五年、他に『はてしない物語』上下、同⁵⁰¹一、二、一〇〇〇年、

『魔法のカクテル』同²⁴⁹、一〇一九年などがある。

(2) 調べてみると、この番組以前にNHK教育放送の「100分de名著」のなかで、『モモ』が河合俊雄の解説で取り上げられていた。『NHK 100分de名著』NHK出版、一〇一〇年八月を参照のこと。

(3) 長期時系列データ、これは、毎日新聞の記事で同志社大学の服部茂幸教授が使っていた統計である(一〇一一・一〇・一八)。アベノミクスを批判して、近年の雇用拡大は労働時間の増加を伴っていないという根拠に使つてしる。

(4) 就業時間に対し、生活時間統計も存在している。『社会生活基本統計』(総務省)であり、一九七六年から五年おきに実施

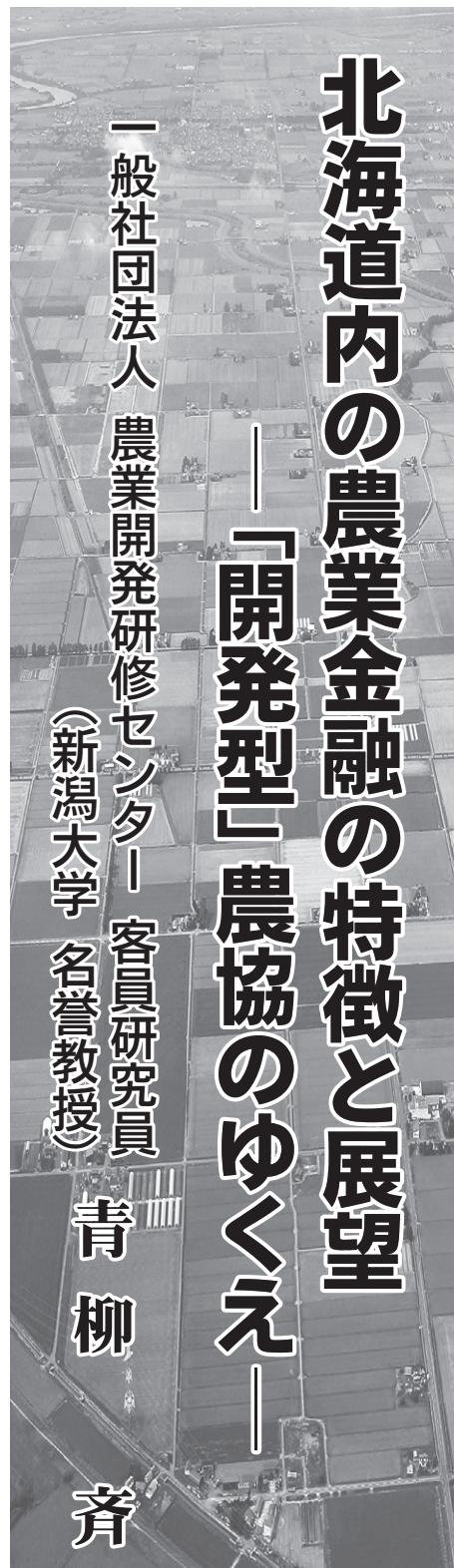
されており、一〇一六年まで公表されている。生活行動と生活時間が内容であるが、紙幅の関係で紹介は難しいので、別の機会に譲ることにする。

(5) 『令和二年国勢調査 人口等基本集計結果の概要』総務省統計局、一〇二一。一人世帯については、人口等基本集計、表11-1から計算した。

北海道内の農業金融の特徴と展望 —「開発型」農協のゆくえ—

一般社団法人 農業開発研修センター 客員研究員
(新潟大学 名譽教授)

青柳
斎



スクロージャー誌（HPに掲載のpdf）を参考にした。

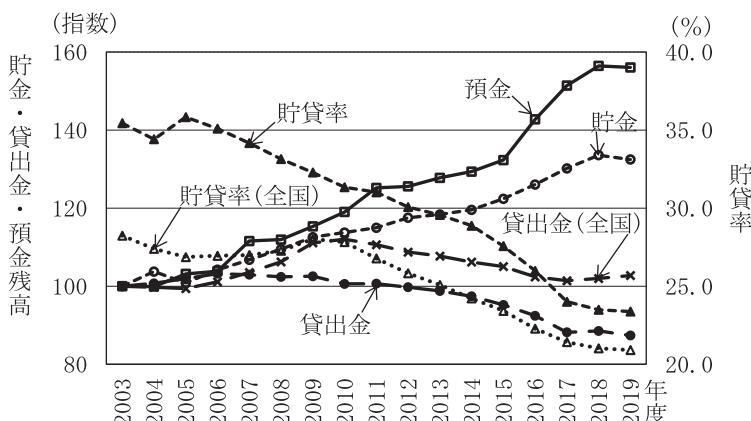
—道内農協金融の概観的傾向

本稿は、主に一〇〇〇年初頭以降の北海道における農協金融の動向について、統計的資料にもとづき、全国的傾向との対比においてその特徴を明らかにし、併せて今後の展望について検討してみたい。なお、道内農協の信用事業実績に関する公表統計は限られており、『総合農協統計表』（農水省）のほかには、北海道農協中央会及び道信連の農協関係資料や農協・信連のディ

最初に、『総合農協統計表』で道内農協における〇三年以降の貯金・貸出金（平残）の動向を概観してみよう。図1によれば、貯金は一八年まで一貫して増大しており、一九／〇三年対比では一・三倍増になる。他方の貸出金は、〇六年以降では減少傾向があり、同年対比では△一三%の減少率になる。したがって、貯貸率は〇六年以降一貫して低下しており、〇五年の三五・八%から一九年の一三・四%へと全国平均並みに近づいてきた。

また、預金は貸出金の動向とは反対に一八年までは増大傾向

にあり、一九〇三年対比では一・六倍増と顕著である。このため、この間の貯預率は、図中には表示していないが、〇三年の六七・二%から一九年には七九・二%へと上昇し、いまや全国農協平均（七六・一%）を超えており、資金運用の系統依存を強めている。



注：各年度『総合農協統計表』より作成。「貯金残高」等の指標は、03年度実績を100とした相対値である。
なお、各数値は月末平均残高で算出している。

図1 道内農協の貯貸率、貯金残高の推移
(残高指数：2003年=100)

このように、現在の道内農協の平均像は、「信用事業を起点とした事業展開」に特徴づけられる「開発型」「農協（坂下明彦他[2]、p.30）のイメージからかなり遠ざかっている。

一 農協貸出の多様性と農業金融の特徴

ところで、道内農協の農業金融面での特徴と動向について検討してみよう。まず、北海道農業の経営規模の大きさは、農家・法人の資金需要の規模に反映している。農水省「経営形態別経営統計」によれば、北海道の「個別経営」の借入金（一〇一九年末）では、短期資金で一三三万円、長期資金では一、〇〇七万円になり、これは全国平均のそれだけ七・四倍及び三・八倍になる。この点で、道内農協金融において農業貸出の比重の高さを予想させたい。

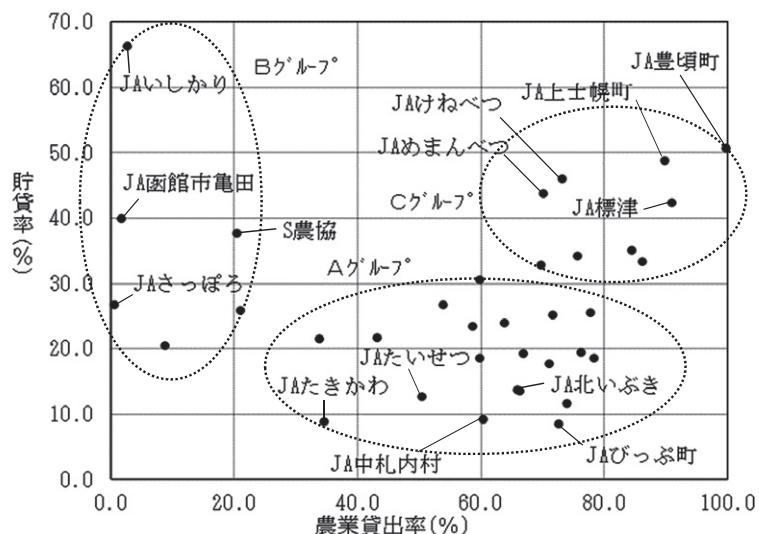
『農林漁業金融統計』（農林中金）によれば、一〇一〇年三月末で系統農協組織の貸出総額に対する農業関連資金（農業関連団体を含む）の割合は、農林中金では一・六%、信連五・二%、農協レベルでも五・四%にすぎない。これに対し、同年末の北海道信連では一四・一%と高いが、関連団体貸付を含まない農業貸出だけでは二・一%に留まる。一方、道内農協については貸出内容に関する公表統計が見当たらない。

道内農協の貸出状況に関しては、小林〔3〕（p.91～94）が農業地帯別の特徴を指摘しており、農家の資金需要が小さい水田地帯では貯貸率が低く、貸預率（預け金／貸出金）が高い。その反対に、大規模な施設投資を伴う規模拡大が進む酪農地帯では貯貸率が高く、貸預率が低いこと、また、畑作地帯では両者の中間的特徴をもつという。

ただし、農協の貸出内容は同じ農業地帯でも単協間の格差が大きい。この点について、ディスクロージャー誌（2010年度実績）をHPに掲載している三五農協^{注1}から確認してみよう。いま、貸出金に占める農業貸出額（団体貸付を除く）の割合と貯貸率の一次元座標で各農協の実績値を示すと、図2のように分散する。貯貸率の低いAグループ、貯貸率が高いものの農業貸出の割合が極端に小さいBグループ、貯貸率が高く農業貸出の割合が高いCグループにおおよそ分けられる。このうちCグループは「開発型」農協に相当し、現在でも道内（主に道東）において一定程度存在している。いくつかの農協（JA）名を明示しているが、同じ農業地帯でも異なるグループに分かれている例がある。

また、各農協の農業貸出率に着目すると、単純平均では五八・三%になり、三五農協合計の総貸出額及び農業貸出額から求めた比率では三五・一%と両者の差異が大きい。それは、総貸出

額の大きい農協ほど農業貸出の割合が低い傾向にあることを示唆している。ただし、いずれの「平均値」にせよ、上述の全国農協の農業貸出率に比べて約六～一倍の高さであり、道内農協金融における農業貸出比重の高さが推察できる。なお、一九年度の道内農協の総貸出額は七、一七〇億円（道信連資料に基



注：各農協のHP掲載のディスクロージャー誌より作成。「農業貸出率」とは、農協貸出金に占める管農資金貸付の割合をいう。貯貸率は平残で、農業貸出率は期末残で算出した。なお、2農協は2019年度の実績である。

図2 道内35農協の貯貸率等（2020年度）

づく) であるが、農業貸出額を上述の平均値比率から推計すればおよそ一、五〇〇～四、一〇〇億円の範囲になる。

ところで、前掲図1で指摘したように、道内農協の貸出金は〇六年以降に減少傾向にあり、特に近年の落ち込みは全国的傾向を上回る。全国農協の場合、その貸出金の動向について『農林漁業金融統計』で概観すると、統計が掲載されている一〇一〇年度以降、農業関連資金は減少傾向にある。具体的には、一九／一〇年度末対比で△一四・七%と減少しており、貸出金に占める割合も六・七%から五・四%に低下している。これに対して住宅資金は、〇一年以降増大傾向にあり、〇九年度の落ち込みや一四／一七年度までの一時停滞はあるものの、住宅資金の貸出割合は〇一年度の三三・二%から一九年度には五九・六%に上昇している。

このような全国的な傾向は、道内の農協にも当てはまるであろうか。近年の北海道農業は、TPPやFTA等による交易環境の悪化にも関わらず健闘している。米価が落ち込んだ一〇一〇年との対比では、一九年の道内の農業産出額は一六%増、農協の販売取扱高では二九%増になり、全国平均のそれぞれ一〇%増、七%増に比べて高い。ただし、金額ベースでの道内農業の「成長」を作付面積や飼養頭数等で捉えた場合、多くの品目で横ばいないし減少傾向にある。また、農業経営の規模拡大の

一方で農業経営体数は激減しており、「農林業センサス」によれば一〇／一〇年対比で四分の一も減少している。

このような情勢からすれば、離農者農地を集積し規模拡大を続ける個別経営レベルでの資金需要は旺盛であっても、道内全体としての農業金融市场は縮小していると推測される。実際にも、ディスクロージャー誌で確認できるいくつかの農協事例では、農業貸出実績は減少傾向にある。一方、近年の都市部の農協では、准組合員の拡大によって貯金や住宅ローンの推進を強化しているように思われる^(注2)。また、地域農業の衰退が著しい農村地域でも、准組合員向け融資拡大に積極的に取り組んでいる農協があるといつ^(注3)。このような点から、道内農協の貸出内容においても上述の全国的傾向と同様と推測される。

近年の農業貸出の減少傾向には、農業金融市场の縮小とは別に、他金融機関の農業参入も影響しているのであろうか。国内全においては、地方銀行や信用金庫等の農業金融市场への参入は最近になって顕著である。『農林漁業金融統計』によれば、国内銀行の農林漁業貸出額は一九／一五年度対比で三七%の増加率になる。道内の銀行でも、農業の地域商社や農業法人支援ファンドを設立して、農業金融ビジネスに進出するような動きがあ

また、日本政策金融公庫（旧農林漁業金融公庫）は道内農業

金融において大きな比重を占めている。系統農協の受託貸付金に限っても、一九年度末の道信連で「一・四一九億円」、道内農協では八四〇億円になる。そして、両者を合計した資金量は、上述の道内農協全体の農業貸出推計額に匹敵する。また、図2の三五農協のうち「一農協は、受託貸付金（公庫資金）の規模が農業貸出金の半額以上であり、うち四農協は農業貸出金を大きく上回る。

道内の農業金融市场が縮小しつつあるなかで、政策金融公庫の受託貸付は増減変動を繰り返しながら横ばい傾向にある。その状況が、道内農協の農業貸出の減少や貯貸率の低下に影響しているかもれない。

ところで、図2に掲載の大多数の農協が貸出実績を減少させていく中で、逆に貯貸率を向上させた農協がある。そのうち図中のS農協（Bグループ）は、貯金高が一千億円強で道内では資金量規模の大きいほうである。ディスクロージャー誌によれば、当農協の農業貸出は「一〇一—二年度で△一六・八%と減少傾向にあり、貸出総額に占める割合は同期間に「一五・一%から一〇・四%に低下している。その一方で、農協の貸出総額においては逆に同年対比で「一六・六%増に伸長し、貯貸率は「一三・一%から「一七・七%に上昇させている。それは、ローン営業センターの設置による住宅ローンの推進強化に加えて、地元の各

種サービス業や建設業、卸小売り・飲食店等多業種への積極的な貸付拡大によるものである。

S農協の取り組みは、農業金融市场が縮小傾向にある今日、地域金融機関としての「開発型」農協の新しい事業展開として注目されよう。

三 道内農協金融の収益構造の変化

ところで、超低金利の金融環境のもとで、貯貸率の低下するわち系統預金運用の拡大が、信用事業部門の収益構造にどのような影響を及ぼしているであろうか。この点について、まず、『総合農協統計表』で道内農協の資金運用収益の動向から確認してみよう。

運用収益の内訳では、〇三年の時点で貸出金利息の割合が七一・四%と極めて高い水準にあり、預金利息「一・一%」、有価証券利息「一・〇%」、その他利息が「一・四・四%」であった。ここで、貸出金利息割合の動向に着目すると、貯貸率の推移に連動して〇三年以降は低下し、「一〇年に五八・七%、一九年には四一・四%までに縮小する。一方、預金利息は「一〇年九・九%、一九年に「一・一%」とその構成比は低いが、「その他利息」（系統運用に対する受取還元金・特別配当金等）は、それぞれ「一〇・五%、

五五・九%と上昇している。要するに、道内農協の運用収益では、いまや系統「預金利回り」（奨励金・配当金含む）が過半を占めている。

運用収益での系統預金依存の強まりは、貸出金の低下と預金の増大という運用構成の変化に留まらず、運用収益性の変化にも起因している。この点について、道信連の農協経営分析調査資料に依拠して、各資金の利回り及び純利鞘等の推移から確認してみよう。

まず、貸出金利回りは〇八年の一・四〇%から一貫して低下し続け、一九年では一・五七%へと〇・八二%も圧縮している。他方、同時期の貸出金原価（調達原価+運用経費率）は一・三九%から一・七四%へと〇・六五%の低下に留まる。その結果、貸出金の純利鞘（貸出金利回り-貸出金原価）は、〇二年の〇・七〇%から〇・八%には〇%へと大幅に縮小したが〇九年以降には順次やに戻り、一年には〇・三四%に回復する。ただしそれが以後、再び低下して一五年まで〇・一%前後の薄利で推移し、一六年以降はついに原価が利回りを上回る逆ざやに転じた。いまや貸出額を伸ばすほど、純収益レベルでは損失が増える事態に変わっている。

なお、貸出金原価を構成する運用経費率は、一〇一〇年以降一・四%前後の横ばいで推移している。他方の調達原価は、一

九／一〇年対比で〇・七八%から〇・三五%に低下している。このことから、貸出部門の赤字化の要因は、〇九年以降において、調達原価の低下度を上回る貸出金利回りの低下幅の大きさにある。

一方、預金部門の収益性の動向に関して、一〇一一年以降の預金利回りと調達原価の推移をみると、前者が一ニ～一九年において〇・六〇～〇・六六%の横ばい傾向に対し、後者は上述のような低下傾向にある。また、系統預金の運用経費率はほぼ〇%の近傍にあることから、預金純利鞘（預金利回り-運用経費率-調達原価）は、一〇年の〇・〇四%の薄利から拡大傾向にあり、一九年では〇・一一四%までに上昇している。

預金純利鞘の上昇要因は、低金利基調下でも預金利回りの維持、すなわち系統預金運用での受取奨励金・特別配当金の大きさにある。その預金利回りの高さは、直接には道信連の利益還元に依存するのだが、せりにその背景には農林中金への預け金利回りの高さに支えられてきた。道信連「ディスクロージャー誌」によれば、一〇一二～一〇年の平均で、貯金利回りの〇・五三%に対して預け金利回りは〇・六五%の高さにある。

ただし、中金の系統預金に対する奨励金水準は、一九年度から段階的に引き下げられている。実際に道信連の預け金利回りは、一八年度の〇・六六%から一九年度〇・六一%、一〇年度

○・五六%へと下がっている。これに対し、貯金利回りは〇・五三%から〇・五一%、〇・四九%と僅微減に留まっており、道信連の単協經營に対する影響緩和の配慮が伺える。

なお、道信連は、一四年度に一四一億円（単体）とこの近年では最高の当期利益を出したが、それ以降減益傾向にあり、直近の一〇年度では四六億円に留まる。その背景には貸出金利回りの大幅な低下があり、〇九年の一・六八%から一〇年には〇・六四%へと、もはや預け金利回りの水準とほとんど変わらない。この厳しい収益性事情は、多くの信連が直面している問題でもあり（注⁴）、今後の単協信用事業収益にその影響が増していくと予想される。ただし、道内農協の場合、都府県農協に比べて経営財務へのその影響度は小さいと想定される。

近年まで、道内農協の信用事業総利益、事業利益は安定的である。『総合農協統計表』によれば、一〇一～一九年において信用事業総利益は三七～一五八億円の範囲で推移しており、平均では一四六億円になる。そして、道内の農協經營における信用部門への依存度は低い。

道信連の農協関係資料によれば、當農指導事業分配賦前の当期損益に対する道内農協の事業部門別寄与率は、一一～一九年において信用事業部門は三七・七～五一・五%の範囲にあり、期間平均では四五・六%になる。これに対して、共済事業の期

間平均は一八・四%、農業関連事業七八・五%、生活その他事業二・九%、當農指導事業分配布額が△六〇・七%となる。

このように都府県とは異なって、道内農協の農業関連事業は共通管理費配賦後損益レベルで大きな黒字部門であり、當農指導事業費を単独で負担する事が可能である。しかし、「生活その他事業」も収支均衡ないしやや黒字であり、各事業部門が独立採算的である。この点で、道内の農協經營の大半は、信用・共済事業に大きく依存していない。

とはいって、剰余金での特別配当や自己資本造成（内部蓄積）において、信用事業部門減益の影響は小さくなく、その収益改善は道内農協にとつても重要な経営課題になろう。また、地域金融機関としての本来的事業理念を掲げるならば、改めて「開發型」農協を志向し、地域内の農業関連産業資金や生活資金等の貸出し積極的に取り組んでいくことが求められる。そのさい、貸出部門の「逆せや」を解消する必要があり、貸出推進の一方で、貸出業務や貯金吸収のコスト低減が喫緊の課題になつてよい。

… … …

注

(1) 三五農協の地区別の農協数は、道央一〇、道東一三、道北九、道南三であり、道東にやや傾斜している。なお、二農協については一〇一九年度実績に依拠している。

(2) 坂下他〔2〕(p.76～79)は、准組合員の増加が都市部で顕著であり、その事業利用が金融部門に集中していることを紹介している。

(3) 正木・小林〔1〕にもとづく。

(4) 近年の系統農協金融及び農業金融の動向については、拙稿

〔4〕を参照されたい。

引用・参考文献

〔1〕正木 卓・小林国之「北海道・北檜山町農協を事例として」
『平成二六年度 少子高齢化が農業協同組合の経営に与える影響調査』農水産業協同組合貯金保険機構、一〇一五年

〔2〕坂下明彦他『総合農協のレーベンモデル』筑波書房、一〇一六年

〔3〕小林国之「北海道における農協事業・経営の現段階」、同
編著『北海道から農協改革を問う』筑波書房、一〇一七年

〔4〕青柳 斎「農協金融問題の焦点とめざすべき方向」『農業と

経済』第86巻第7号(1010年8月)、26～34頁

青柳 齋(あおやぎ ひとし)氏

【プロフィール】

1954年岩手県生まれ(本籍は山形県)。

新潟大学農学部卒業、京都大学大学院農学研究科博士後期課程修了(農学博士)。

新潟大学農学部、福島大学農学類設置準備室を経て、現在は(一社)農業開発研修センター客員研究員、福島大学客員教授、新潟大学名誉教授。



【専門分野と主な著書】

専門は農業経済学(米産業論、協同組合論、中国農業論)。

主な著書は、単著『農協の組織と人材形成』全国協同出版、

単著『農協の経営問題と改革方向』筑波書房、単著『中国農村合作社の改革』日本経済評論社、編著『中国コメ産業の構造と変化』昭和堂、単著『米食の変容と展望』筑波書房など

Report

持続可能な農村集落の維持・向上と 新たな産業振興に向けた対策手法の確立 ～道総研・戦略研究／地域Ⅱ～

(地独) 北海道立総合研究機構 北方建築総合研究所
地域研究部 地域システムグループ

研究主幹 牛 島 建

一・はじめに

地方独立行政法人北海道立総合研究機構（以下、「道総研」という。）は、道立の二二の試験研究機関が一つになって、平成二二（二〇一〇）年に発足しました。農業、水産、森林、産業技術環境、建築の五研究本部で構成される、全国でも珍しい総合的な公設試験研究機関です。長年培われた各々の専門分野での専門技術を活かした試験研究に加え、道総研となってからは幅広い専門分野を擁した総合力を生かし、北海道が直面する様々な課題に取り組んでいます。

今回ご紹介する戦略研究は、道総研の総合力を生かして取り組む、道総研の中でもトッププライオリティの事業です。現在は、食、エネルギー、地域の三つの課題が設定されており、私どもが取り組んでいるのはそのうちの「地域」の課題です。本課題は、農村集落を暮らしと産

業の両面からとらえてその対策等を開発する研究課題であり、五研究本部のうち、建築、農業、林業、産業技術環境の四研究本部が参画して実施しています。戦略研究・地域は、第Ⅰ期（平成二七～令和元年度）を完了し、現在は第Ⅱ期（令和二～六年度）に入っています。本稿では、第Ⅰ期の主な成果と、第Ⅱ期で現在取り組んでいること、そして今後の展望について紹介したいと思います。

一・戦略研究第Ⅰ期の取り組み と成果

戦略研究第Ⅰ期では、「農村集落における生活環境の創出と産業振興に向けた対策手法の構築」と題し、大きくは「集落の生活環境創出に向けた対策手法の開発」と「産業振興施策構築に向けた対策手法の開発」の二つのテーマについて研究を行いました。それぞれ、内容は非常に多岐にわたるため、本稿では前者の

「集落の生活環境創出に向けた対策手法の開発」に絞って、いくつかの成果を紹介したいと思います。なお、戦略研究第一期の成果は、道総研ウェブサイトで公開していますので、ぜひお読みください。

(http://www.hro.or.jp/research/develop/system/completed.html)

(一) 集落単位での将来人口の予測手法の開発

集落の将来を考へる上で、将来

人口予測は、非常に最も基本となる情報の一つです。一般に引用される国立社会保障人口問題研究所の人口推計は、コーホート要因法を用いており、比較的精度の高い予測が可能とされています。しかし同じ方法を、集落など人口規模の小さい対象に適用すると、予測不能もしくは予測精度が低下するといった問

表1 20歳階級別社会移動率と集落属性の相関

各データ	年齢区分別社会移動率			
	0~19歳	20~39歳	40~59歳	60歳~
集落人口	-0.3085	-0.2175	-0.3997	-0.3757
農業割合	-0.1053	-0.0677	0.1593	-0.1530
林業割合	-0.0355	-0.0047	0.0357	-0.0387
漁業割合	-0.0956	-0.0547	0.1394	-0.1355
建設業割合	-0.0634	-0.0508	0.1079	-0.1033
製造業割合	-0.0803	-0.0583	0.1291	-0.1229
電気・ガス割合	-0.0520	-0.0119	0.0373	-0.0132
運輸・通信割合	-0.0271	0.0190	0.0025	-0.0127
卸売・小売割合	-0.0711	-0.0487	0.1140	-0.1135
金融・保険割合	-0.0561	-0.0492	0.0623	-0.0297
不動産業割合	0.0064	0.0159	0.0297	-0.0917
サービス業割合	-0.1104	-0.1048	0.1890	-0.1645
公務員割合	-0.0746	-0.0880	0.1693	-0.1774
持ち家割合	-0.0568	0.0201	-0.0283	0.0636
公営割合	-0.0723	0.0363	-0.0332	0.0712
民営割合	0.0393	0.0517	-0.1041	0.1084
給与住宅割合	-0.0434	0.0225	-0.0038	0.0028
従業通学	自市区町村 従業者割合	-0.0422	-0.0604	0.0369
	自市区町村 通学者割合	-0.0219	0.0217	0.0090
世帯	6歳未満のいる割合	0.3234	0.1535	-0.1823
	65歳以上のいる割合	0.0115	-0.0075	-0.0345
				0.0500

題がありました。本研究では、集落の人団から類似性の高い集落をまとめて考えることにより(表1)、小規模集落においても精度の高い人口予測が可能となる手法を開発しました。これにより、予測結果の平均誤差が従来法の一~二%から一三

%へと減少し、本研究で対象とした集落

(二) 集落再編によるコスト削減効果の評価手法開発

集落を再編した場合のコスト削減効果については、集落ごとに効果的な集約パ

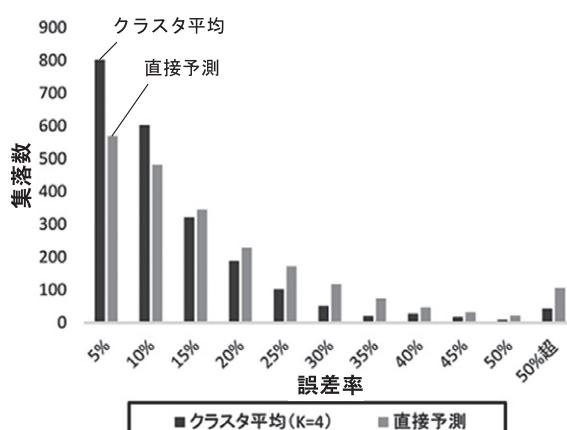


図1 従来法(直接予測)と本研究の手法(クラスタ平均)の誤差率別集落数

ターンが異なると考えられたことから、モデル地域のいくつかの集落において、複数の集約パターンを想定してインフラ維持管理コスト（累計）と集落移転補助事業費をそれぞれ比較しました（図2）。その結果、集落によって効果の大小はあるものの、いずれかの集約方法によって、自治体の将来負担を減らせる可能性が示されました（図3）。

(II) 通い作可能範囲の推定と居住地集約化への参加意向

続いて、農家が居住地集約化に参加しうるか否かの目安として、通い作可能範囲の検討を行いました。モデル地域において、農作物一〇aあたり労働時間で作物種をクラスタリングした結果、穀物露地野菜系とハウス野菜系の大きく二つに分類することができました。そして、それぞれの作物種グループにおける農家の住居と耕作地の間の最大距離を「通い作可能範囲」の目安と考え、仮にその九五

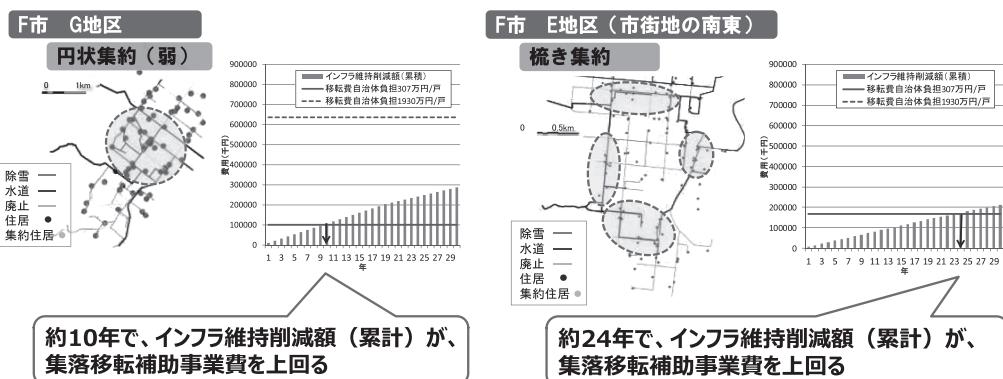


図2 インフラ維持管理コスト（累計）と集落移転補助事業費の比較結果の例

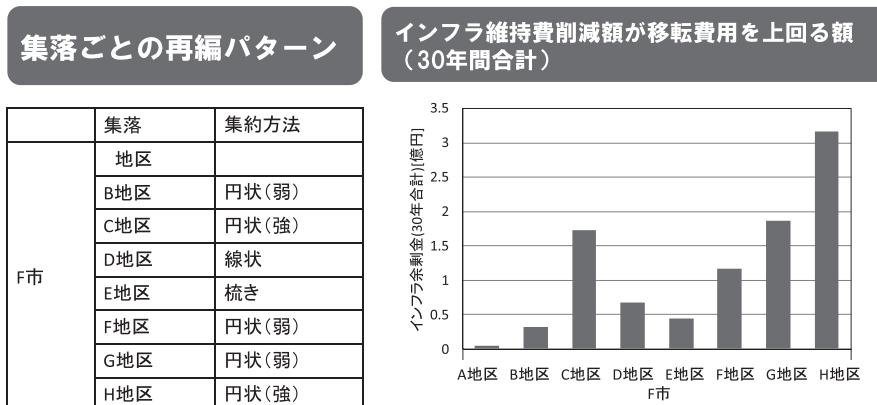


図3 モデル市町村において予想された居住地集約化によるコスト削減効果

パーセンタイル値を求めたところ、穀物露地野菜系で直線距離五km、ハウス系野菜で直線距離一kmがその田安と考えられた(図4)。この結果を踏まえることで、先の集約化によるコスト削減効果評価は、より現実に即した形での検討が可能となりました。

また並行して、三つのモデル地域において住民の意向をアンケートで調べた結果

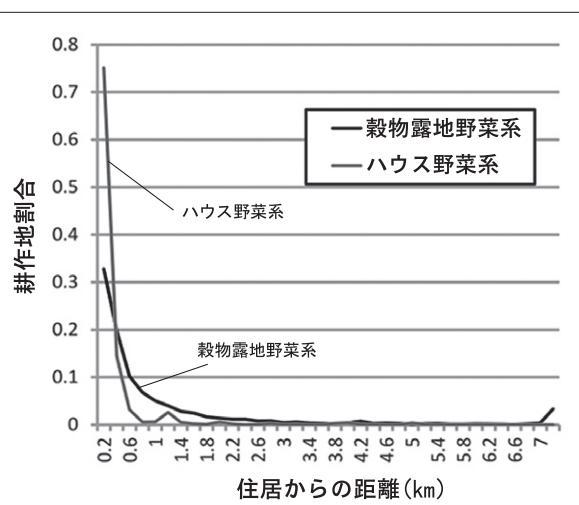


図4 農家の住居から耕作地までの距離

果、居住地集約化の取り組みについても、いずれも八割以上が「こい取り組みだと思つ」と答へ、参加意向も「すくにでも参加したい」が全回答者の四～七%、「状況が変われば参加を検討する」が約二〇～五〇%と、居住地集約化を現実的に考えている住民は決して少なくないことがわかりました。なお、この傾向は農林業従事者とそれ以外で分けて集計しても、ほとんど差は見られませんでした。

(四) 新たな居住形態の実現手法

居住地集約化を想定した、新たな居住形態の検討をおこないました。本研究では、実際に集住化住宅が計画された下川町上名寄地区を対象に、住民アンケートや個別聞き取り調査、ワークショップなどをおこない、実際にどのような属性の住民が集住化住宅への入居を検討しているのか、

どのような居住形態を望むのか、地域の中で集住化住宅はどんな役割が期待されているのか、などについて検討しました。上名寄地区の例では、年代や入居のタイミングなどによって、「独身世帯(10～11歳)」「子育て世帯(11～12歳)」「「現役世帯(13～14歳)」「「子育て世帯」には、農家の後継者が多いため、「現役世帯」はすぐには入居しないものの、将来的な入居を想定して、今から関連活動に関与する意向がある」と、などがわかりました。(うした結果を踏まえて住民ワークショップを行い、表2に示すよつた扱い手と役割を想定し、空間としては図5に示すよつて、一定のプライバシーは確保しつゝ、コモンリンク(地域の居間)を設置して入居者以外の地域住民も命めた交流の場を設ける案をつくることができました。

表2 集住化住宅の居住者の特性と運営の担い手としての可能性

	20~30代 独身世帯	20~30代 子育て世帯	40~60代 現役世帯	60代~ リタイア世帯
農家	【入居意向】○ 【運営参加意向】○ 【特徴・制約条件】体力あり、時間もある程度あり、消極的、プライバシー優先	【入居意向】○ 【運営参加意向】△ 【特徴・制約条件】体力あり、社交性あり、子育てのため時間に制約	【入居意向】△ 【運営参加意向】○ 【特徴・制約条件】機材あり、経験あり、管理能力あり、集住化のニーズは低い	【入居意向】○ 【運営参加意向】△ 【特徴・制約条件】経験あり、技術あり、時間あり、体力がない
非農家			【入居意向】△ 【運営参加意向】○ 【特徴・制約条件】経験あり、管理能力あり、集住化のニーズは低い	
新規農	【入居意向】○ 【運営参加意向】○ 【特徴・制約条件】体力あり、時間もある程度あり、消極的、プライバシー優先			

※図中の記号： ○高い ○あり △あまりない

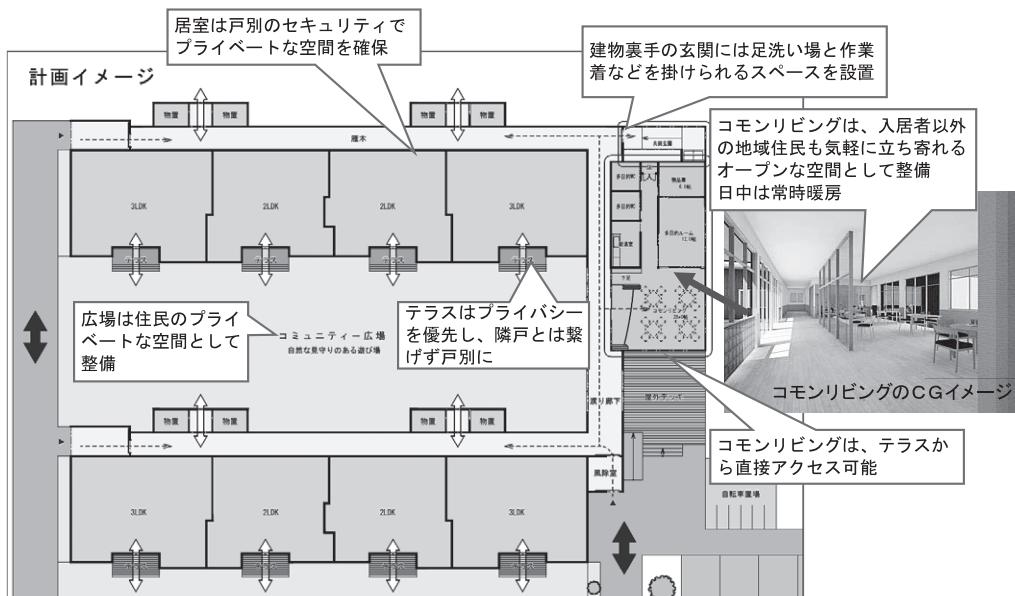


図5 住民ワークショップを経てつくられた下川町上名寄地区の集住化住宅の計画

り組んでいます。「くり」を大きなテーマとして取り組んでいます。

第Ⅰ期では、生活、産業の両面から、主に現状課題の理解と解決策検討に向けた各種手法を開発しました。一方で、各種現地調査を通じ、地域運営の担い手確保や、行政による維持管理が難しくなりつつある各種インフラの維持管理を実際に誰がどうやって担うのか、といった現場の深刻な課題も、新たに明らかになりました。「こうしたこと

三、第Ⅱ期の取り組み ～新たな共助のしくみづくりへ

(一) 新たな共助の必要性

北海道の農村地域では、今後も人口減少は続くと考えられます。人口が減少するなかで地域を維持運営する際の問題は、人口が減っても地域の維持運営に必要な労力はあまり変わらない、すなわち、一人当たりでみれば負担は大きくなっています。こういったところにあると考えていました。たとえば、のちに紹介する地域自律管理型水道（水道利用組合等により地元住民が運営する水道）などは、水道利用組合といつ昔からの共助のしくみで成立していますが、人口減少の著しい地域では、水道利用組合幹部の高齢化と人材不足により、その存続が難しくなり始めているところが出てきています。

また、商店や交通事業者をはじめとする民間部門は、人口が減ればそれだけ顧客のパイが減ることとなり、廃業・撤退が各地で進行しています。こうした民間サービスの撤退によって住民の生活に支

障が出る部分（例えば交通）については、現状では地方自治体が委託事業として存続させるなどしていますが、それも地方自治体にとって大きな負担となっています。そこで、新たな共助のしくみが重要になると考えています（図6）。これは、従来の地域内の助け合いや地縁組織による地域運営体制に戻すということではなく、自立経営を前提とした組織による地域運営の体制であります。総務省はこうした組織を「地域運営組織」と呼び、近年、事例紹介や設立マニュアルの整備が全国的に進められています。

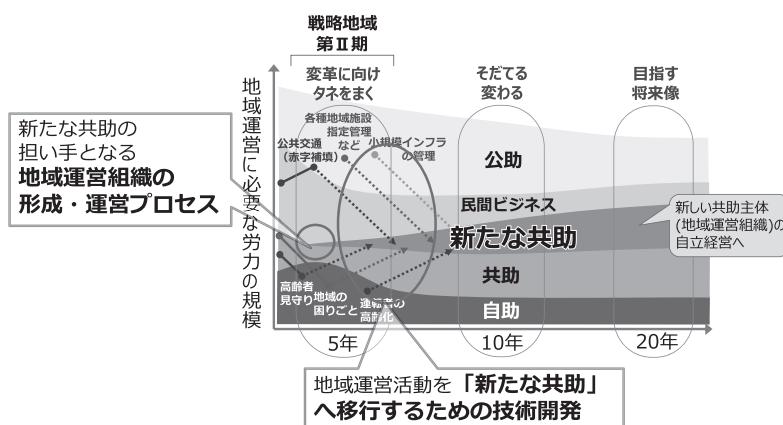


図6 地域運営に必要な労力の今後のイメージ

(二) 地域運営組織立ち上げの実践ガイド

事例調査や、いくつかの地域のみなさまへの支援活動を行っている中で、地域運営組織を立ち上げて持続的に活動してもらいたために今必要なことは、大きく二つあると考えています。一つは、実際、どのようにして組織を立ち上げていけばよいかを示すことです。先述のとおり、総務省はじめ、マニュアルはウェブ等でも公

開され始めていますが、実際にどのようにして立ち上げるかのノウハウは、まだ広く共有されていない状況です。戦略研究地域の第Ⅱ期では、実際に複数の地域の方々と一緒に地域運営組織の立ち上げを行い、そのプロセスで得られた知見やノウハウを、実践ガイドとして取りまとめるなどを目指して研究を進めています。

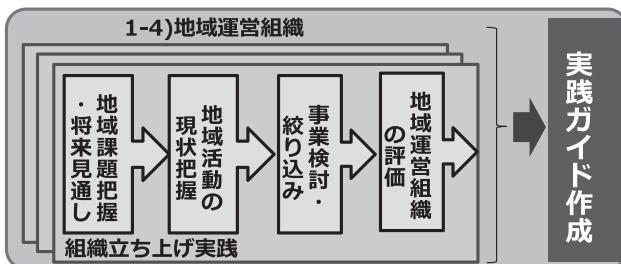


図7 地域運営組織立ち上げのプロセス

現在は、仮説として図7に示すようなステップを設定し、併せてそれぞれの検討課題を見える化するための各種ツールを提案し、それに従って実際の立ち上げ支援を進めながら、知見とノウハウの蓄積を図っています。

(II) インフラ管理を公助から 共助へ

新たな共助への移行を考える上で重要なと思われるもう一つの点は、これまで、民間、住民（自助）、行政（公助）または地域の共助が担ってきた各種地域運営活動や地域課題への対応を、どのようにすれば「新たな共助」に受け渡すことができるかという技術的な解決策の提示です。これについては、様々な分野が考えられます。が、戦略研究第Ⅱ期においては、まず、多くの地域で共通しており、かつ重要性が高いと思われる①水インフラの維持管理、②地域交通の確保、③高齢者見守りの三つに絞って、具体的な解決策の

提示に取り組んでいます。

一例として、以下、水インフラの維持管理について述べます。北海道の水道インフラは、人口で見れば九二%が上水道（給水人口五〇〇一人以上）を利用していますが、給水区域面積で見ると上水道がカバーするのは全道可住地域面積の約三分の一であり、残りの三分の二は簡易水道（給水人口一〇一人以上五〇〇〇人以下）や、それ以外の小規模給水施設（多くが地域自律管理型水道）によってカバーされています。行政が運営する上水道および簡易水道は、一般に、規模が小さいほど経営は厳しいとされており、多くの市町村が簡易水道の維持管理運営には苦労をしています。数年前に水道民営化の議論が話題になりましたが、こうした小さな水道は、民間にとつても収益事業化は難しく、なかなかターゲットにはなりません。こうした状況を踏まえ、私どもはこれまで情報の少なかつた地域自律管理型水道に着目し、新たな共助に

よる地域運営を考える際の、ベースのモデルと捉えて、その実態把握や多様な運営形態、行政の支援体制などの情報を収集してきました。その結果、確かに給水人口の減少や担当者の高齢化は進行しているものの、多くの水道利用組合は、ほとんど処理のいらない良質な水源と、地域のマンパワーを活かしながら効率的な運営を行っていることが確認されました。そして、支援すべき課題も概ね①水質事故を検出するリスク管理体制、②地域で連携した水源地環境保全、③管路地図などのアセット情報整備に集約されることもわかつてきました。

これらの支援すべき課題を地域で補完する仕組みとして、地元高校の活動と連携した支援体制づくりや（図8）、地域運営組織への委託を定した市町村との連携体制の検討を進めています。最終的には、こうし

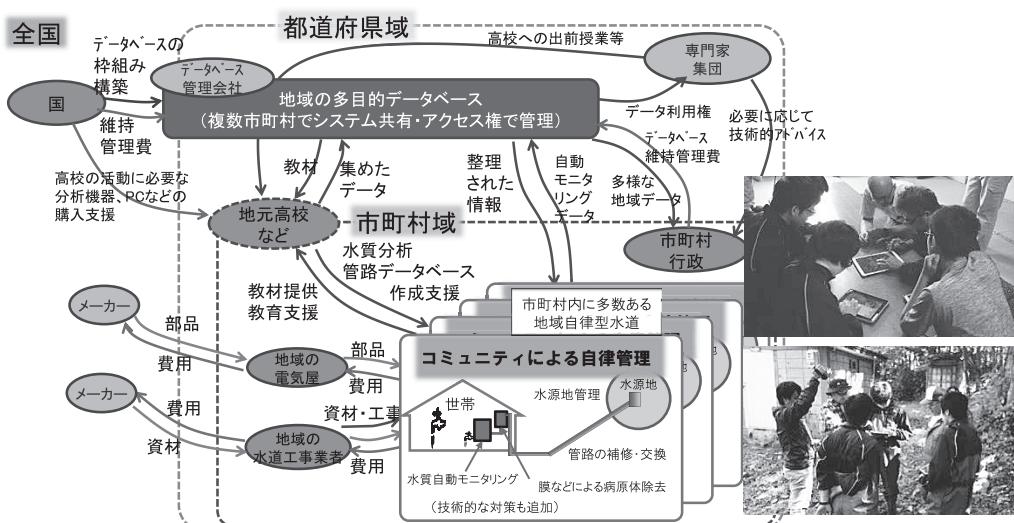


図8 地元高校を中心とした地域自律管理型水道の支援体制の例

た情報を使って、役場、地域住民、地域運営組織などの地元関係者が自ら水インフラの維持再編をコスト、手間、持続性等の観点から検討するための支援ツール「地域水インフラ再編支援システム」として取りまとめるなどを目標として取り組んでいます。

四 今後の展望

今回ご紹介できなかった、交通や高齢者見守りの取り組みについても、それぞれフィールドで調査と実践を行いながら、その結果は、それぞれ新たな共助の手法として整理できます。そして、先の地域運営組織立ち上げの実践ガイドと合わせて、地域で「新たな共助のしくみ」を構築する際に、活用していただけるようになりまとめてまいります。

研究報告

地産地消延長型マーケティング論序説

北海道大学大学院農学研究院 教授 坂爪 浩史

一・はじめに

本稿は、二〇一八年から二年間にわたって実施された北海道地域農業研究所の自主研究課題「六次産業化・農商工連携の展開と農畜産物・食料市場のニューウェーブに関する調査研究」の結果概要報告である。以下では本研究の概要を紹介するとともに、研究会を重ねる中で達成した「地産地消延長型マーケティング」というコンセプト、販売戦略についての予備的な考察を行いたい。

二・自主研究の概要

(一) 農畜産物・食料市場のニューウェーブ

本自主研究を立ち上げる際の問題意識、情勢認識は以下のと

おりであった。

かつての北海道農業は、流通面からみれば遠隔地農業として、また原料供給産地として位置付けられてきた。つまり、生産した農産物を生鮮農産物あるいは一次加工品として遠く離れた大消費地に供給するという役割を持つてきた。

しかし、近年、地産地消が実践的な運動として定着し、遠隔地向けではなく地場消費向けの流通が注目されるようになってきている。北海道においても、移輸入品に占められてきた道内市場を道内産品に置き換える米チェン、麦チェンなどの運動が成果を収めてきている。生鮮食品についても栽培期間が短いという根本問題を抱えつつ、よくねた野菜シリーズ、冬季無加温ハウス栽培など、栽培・販売期間の長期化にも資すると考えられる技術も開発されつつある。

他方、食料消費市場における食の簡便化指向の強まりに対応する形で、(生鮮形態での出荷ではなく) 加工・業務用需要への対応が叫ばれるようになってきた。北海道においても、米の

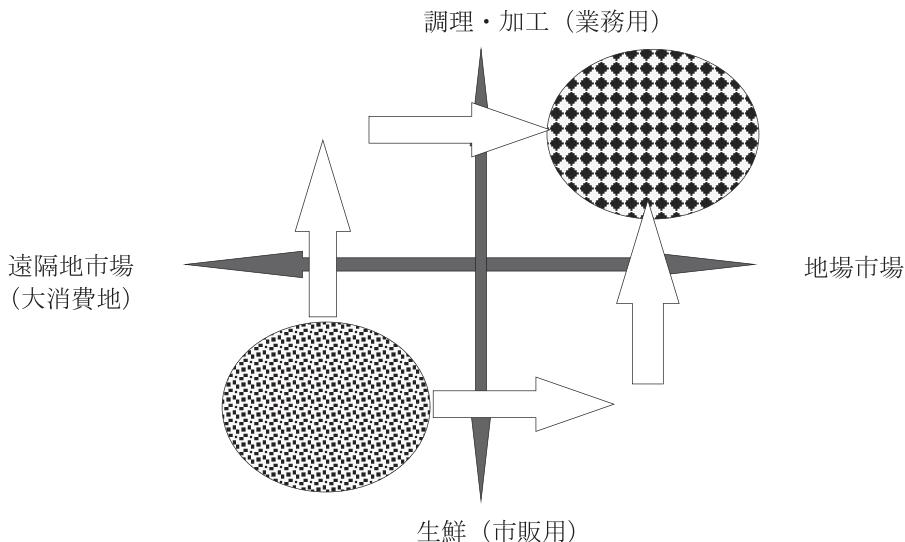


図1 農畜産物・食料マーケティングの新たな展開方向

加工業務用対応、新品種の開発を受けたパン用小麦の販路拡大、野菜についても農協系統組織によるタマネギの全道加工井計、業務用キャベツの産地開発などの取り組みが盛んになつてきている。このように、農畜産物・食料市場のトレンドは、遠隔地＋生鮮から地場＋加工業務へと転換してきているといえる（図1参照）。本研究は、こうしたさまざまな新動向をニューウェーブと包括的に捉え、道内外の先進事例を収集、分析しようとするものであった。

(一) 研究班の構成と研究経緯

こうした自主研究の実施に当たり、筆者その他、小池（相原）晴伴（酪農学園大学）、今野聖士（名寄市立大学）、清水池義治（北海道大学）、山際睦子（同）、末永千絵（同、現在秋田県立大学）、川辺亮（農都共生総合研究所）、脇谷祐子（北海道地域農業研究所）の合わせて八人の研究者に、佐久間良博（コムギケーション俱楽部）、小路健男（北海道有機農業協同組合）という一人の実務家を加えた一〇人の研究班を組織した。

共同研究は途中、暴風雪、胆振東部地震、新型コロナウイルス蔓延による諸規制等に翻弄され、また本研究の発案者であった飯澤理一郎前所長の急逝に衝撃を受けつつも、合わせて一

回の研究会を開催することができた。研究会ではメンバーによる報告に加え、杉山雅則（満寿屋商店）・佐々木威知（セコマ）両氏の実践報告もいただき、活発に討論を行った。

このような経緯で行われた共同研究だが、当初は新しい事象の発掘と分析が中心であり、特定のフレームに収斂させることには想定していなかった。しかし、研究会を重ねるうち、一本の筋があがり昇ってきた。それが地産地消延長型マーケティングである。

地産地消延長型マーケティングとは、地場生産、地場加工・調理、地場販売（消費）という地域内循環、地産地消を基本としつつ、その需要を超える農産物・食品を域外に移出するという販売戦略である。北海道を中心に据えれば、北海道内における地産地消と地場（最終）加工を基本にしながら北海道民の支持を得てブランドを確立し、北海道外へはブランド物の完成品として売っていく、ことである。

都府県農業が加速的に縮小していく中で、北海道に今後ますます多くの原料、農産物を求めてくることが想定される。しか

III. 地産地消延長型マーケティング論の提起

(一) 地産地消延長型マーケティングの概念

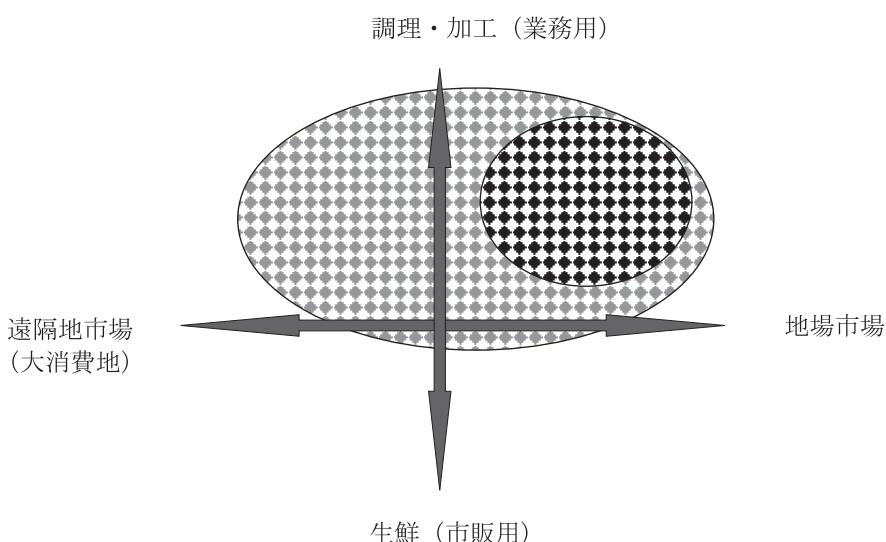


図2 地産地消延長型マーケティングの領域

し、そつしたニーズに安易に応じることなく、北海道内での最終製品への加工、道内市場への供給を優先していくといつ選択肢もあってよい。その意味で、この戦略はマーケット・インではない。加工品を含め、あくまでも北海道内市場を優先しつつ、その延長線上に道外市場を位置づけるといつことである。以上を図に表せば図2のようになる。

(II) 地産地消延長型マーケティングの実践例

本共同研究の中で、こうした道内最終加工、消費を基盤としつつ、余剰分を道外移出している取り組みとして、注目すべき成功例が見出された。正確に言えば、これらの事例から地産地消延長型マーケティングが着想された、といふことである。

①満寿屋商店

ひとつは、帯広本店のベーカリー、満寿屋商店（ますやパン）である。同社は構想から三年をかけて一〇一二年、原料小麦の全量を十勝産にすることに成功した。その手前で北海道産小麦一〇〇%を達成していたが、全量十勝産を達成したとたん、地元の消費者が反応し、爆発的に売り上げが伸びたそうである（二割増）。農家でもある客は「何十年も作ってきたけど、自分作った小麦を初めて食べたよ」と喜んでくれた。ますやパン

②セコマ

また、コンビニエンスストア道内最大手のセコマ（セイコー マート）は、店内で販売する多くの加工食品を自社のグループ企業において実質的に直営生産を行っている。そのそれぞれについて、効率的な生産を図るため一定規模の加工工場を整備し、自社店舗で売り切れない部分については道外の食品スーパーなどに積極的に販売拡大を行っている。これらの工場は意識的に全道各地に分散配置されており、各地の特産品を発掘して商品化につなげている。こうして生まれた開発商品は、やはり地元店舗での売上が段違いに大きいといつ。

③北日本フード

さらに事例を挙げれば、漬物企業の北日本フードは、北海道内産の野菜等を中心にキムチを製造し、道内でブレークし、道

はこつした経験を経て、東京にも一店舗を展開し、十勝産の小麦を（当初は水も）使ってパンを焼いている。なお、同社は新型コロナウイルスの影響で一〇二一年、東京からの撤退を決めたが、緊急避難的な対応の側面が強いと想定される。何より、東京がアウトになつても帰るところがある、地元で盤石のファン層を持っている。このことが地産地消延長型マーケティングの強みであることはいうまでもない。

外にも出荷している。同社は現在、「北海道地産地消のおすそわけ」というコンセプトを掲げ、道内産原料比率を一層上昇させるとともに、プラスアルファとして道外市場を位置付け、販売戦略の再構築を進めている。「北海道地産地消のおすそわけ」は同社の登録商標であるが、地産地消延長型マーケティングの愛称としてお借りしてもいいかもしない。

四・むすびにかえて

以上、自主研究「六次産業化・農商工連携の展開と農畜産物・食料市場のニユーワードに関する調査研究」の概要ならびに地産地消延長型マーケティング論の序説としてその概念と実践例について述べてきた。このように、地産地消延長型マーケティング論は、地産地消論（地場流通論）はもちろん、地域産業複合体、農商工連携、広義の六次産業化等の議論と重なり合う部分が大きく、より広くいえば内発的発展論に包み込まれるものである。

実践例としてはこれまでのところ、北海道内の事例を発掘するに留まっている。しかし、農業生産力が高く、一方で消費市場が比較的小さい地域では、北海道のように地産地消運動が供給過剰の壁にぶつかりやすく、その打開策として地産地消延長型マーケティングの有効性は高いと考えられる。出来れば今回

の成果を一般書籍として出版し、別途研究費を確保して共同で全国レベルの調査研究を展開したいと考えている（が、「これは初夢か、はたまた白眉夢かもしない」）。

参考文献

- 丸谷智保・脇谷祐子「北海道における食ビジネスと物流戦略－株式会社セコマのサプライチェーン構築－」『農業市場研究』第30巻第2号、一〇一一年九月、52～59頁。
橋本卓爾・大西敏夫・辻和良・藤田武弘編『地域産業複合体の形成と展開』農林統計協会、一〇〇五年七月。

いきいき農業高校 第15回



北海道新十津川農業高等学校

一 学校の概要

新十津川町は米どころ中空知のほぼ中央に位置し、滝川市に隣接する人口六、五〇〇人の町です。新十津川町は基幹作物である水稻生産を中心とした地域で三、五〇〇haを作付けしている道内屈指の良質米を生産する町です。主食用米であるゆめぴりか、ななつぼし、ふっくりんこのほか、酒米は作付面積北海道一で、高品質米の安定生産地域です。

近年は、農家の高齢化等により農家戸数が減少し、将来的には農家一戸あたりの耕作面積は現在の一・三・七haから三〇ha規模へ拡大することが予想されており、いち早くスマート農業技術の開発と実証試験が実施されていて、GPS機能付きの田植機六二台、農薬散布用ドローン七八台、自動操舵システム一〇台が導入され農作業の省力化、

作業の効率化に向けた取り組みが町の支援のもと、推進されています。

本校は町の中心部に位置し、昭和五六年に現在の農業・生活科一間口となり創立七三年、一、五〇〇名余の卒業生が地域の産業を支えています。

本校は全国で唯一の農業・生活科の学科で、類型学習を導入して農業類型、生活類型の学習を実践しながら農業教育とヒューマンサービスの教育を中心に、一人ひとりの個性を十分に發揮できるような教育を目指しています。

本校の使命は、生命を慈しみ育てる」ことを基盤とし、自らの未来を切り開く創造性豊かな人間教育を推進し、農業や食・福祉に係わる知識や技術を習得させ、地域社会の発展を担うことのできる能力と使命を持った人材を育成することです。一年生は農業の基礎・基本をカボチャやもち米等の生産活動を通して学習しています。

二年生からは類型学習を導入しコース制学習を展開しています。

農業コースは、農業の専門性を高める学習で、水稻、作物、野菜など安全・安心な農産物生産を軸に加工、販売に関する基礎的な知識や技術を学んでいます。生活コースは食と福祉の専門性を高める学習を展開し、草花やガーデニング、フードデザイン、福祉に関する学習を行っています。

II 実践概要

■スマート農業の学習

新十津川町では令和元年度より水稻におけるスマート農業実証プロジェクトが開始されました。新十津川町、ピンネ農業協同組合、空知農業改良普及センター、中空知支所、新十津川土地改良区、ピンネ農業公社、北海道クボタ、農業者が連携して実施しているプロジェクトです。

本校はこのプロジェクトを間接的に見学会や学習会の機会をもつて、スマート農業学習を行っています。

令和元年度は、六月に無人トラクタによる耕起作業のデモンストレーションとラジコン草刈り機のデモンストレーションを見学しました。

本校の第二圃場を会場にして、小学生、本校農業コース一、三年生三〇名、地域

の農家の方々など見学者のいる中で、ラジコン草刈り機の説明と作業の様子を見学しました。

続いて、自動運転トラクタによる耕起作業では、その性能と作業状況を見学しました。生徒達からは機械費用や資材費用、作業効率や問題点について、農業者の方や社員の方に質問するなど積極的に学習しました。

まし

一〇月に実

施した自動運転アシスト機

能付き収量・

食味自動取得

コンバインによる稻刈り作

業の見学を実

施しました。

自動運転で運転操作そのも



のは大変容易ではあるが、危険を認識するセンサーが付いていないことから、コンバインの運転席には着いていなければいけないことも説明を受け、実際に運転席に乗り込み自動運転の操作体験も行いました。

一月には実証研究をされている農業者の方を招いて、一年田の実証研究報告会とグループ討議を本校で行いました。農業者の方からはスマート農業から見



る農業経営・栽培技術について、一年間の実証研究の内容説明と、来年度の取り組みについて講演していただきました。

グループ討議では、講演から学んだこと、実践してみたいことについて話し合って発表し、スマート農業の可能性について、学習を深めることができました。令和二年度は、ドローンによる薬剤散布の見学会を七月一二三日に実施しました。

今後は、継続して農場見学会をはじめ、講演会でスマート農業の可能性や地域農業の課題について、農業者、自治体それ

の目標からお話しいただき、学校としてこれから学習活動に大いに活かし取り組んでいきたいと考えています。また、本校においてもスマート農業の実践

学習を目標として、自動操舵システムの導入等を検討しています。

■ GAP の学習

道内の農業高校において実際に GAP 認証圃場による農業学習が実践されている中、本校では空知総合振興局の協力のもと、GAP 学習を令和二年度より実施しています。

一年生を対象に、GAP の基礎

を学ぶ講演会で、GAPの意義や目的、実践の内容についての基礎学習を行っています。今年度は、一年生は昨年に引き続き、講演会を実施しました。三年生は芦別の認証農家を見学させていただき、実践されている農家の方から取り組み内容や実際の施設設備を見学させていただき、多くを学ばせていただいています。



また、作物や野菜の授業において、実際に施設の整備や生徒間での協議を行い、本校施設の問題点や改善策についての学習と実習での改善学習に取り組んでいます。

■新十津川小学校との食育学習

食育体験学習は、一年前までは新十津川小学校の全学年児童と実施していましたが、新型コロナウイルスの影響で、昨年度は中止となり、今年度は三年生と五年生の一学年で実施しました。

小学三年生は本校の一年生の指導の下、サツマイモの栽培学習、五年生はイネの栽培学習を行い、植え付けから収穫、試食を行うなど、地域の農業や食の大切さについて、異世代交流をとおして学習しています。

小学二年生のサツマイモの栽培学習は五〇名の児童を対象に、本校の一年生一五名が指導してきました。あらかじめ、



事前学習と栽培実践を行いながら、児童への指導方法について意見交換を行い取り組みました。コロナ禍の中、感染対策を万全に取りながら、児童一人あたり四本の苗の植付指導とサツマイモの基礎学習をグループごとに展開しました。生徒達からは、教えるのが難しかった、イメージした流れで全然できなかつたなどたく

さんの反省と学びを学習でき、秋の収穫作業に向けて準備を進めてきました。

秋の収穫は予定していた時期が天候等

の影響で順延となり、圃場の状態は最悪の中で収穫作業を実施しました。まずは

じめに、サツマイモがどのようにできているのかを自分たちで掘り起しながら、サツマイモの付き具合とその大きさに歓声が上がり、生徒達も嬉しそうに指導をしていました。確

生徒達は、この経験から児童との交流をはじめ、指導の難しさ、準備の大切さなどたくさんの学びを得て、今後の学習活動にいかしていきたいとさらに意欲が高まっています。

五年生のイネの栽培学習は、新十津川



していま
した。確
認後は、
デイガーデ
で掘り起
こしたサ
ツマイモ
をコンテ
ナに収穫
し、後日
小学校に
お届けし



への愛着を深める機会としています。五月の田植え体験では、本校で育てた苗と一緒に田植え作業を行いました。みんな裸足になって、水田に入り、土のぬくもりを感じながら、一株一株丁寧に植えていました。あらかじめ、事前学習で苗の取り方、植え方、水田の中の歩き方について生徒同士で打ち合わせを行い、実践

町教育委員会、美
里ネット、ライ
オンズクラブ、本
校の水稻専門分会
(二、三年生のグ
ループ一〇名)が
連携し、田植え、
観察、稻刈り、收
穫祭、お米の味比
べ学習を行って、
地元農業やお米の
理解を深め、郷土

しましたが、生徒達はわかりやすく説明する難しさを感じていました。

秋の収穫作業は、新型コロナウイルスの関係で一〇月に実施しました。イネ作りの苦労や収穫の喜びをかみしめながら作業を行い、収穫したイネは、はさがけしました。

一一月に小学校で収穫祭を実施して、小学生によるお米学習の発表や高校生によるイネ作りの話、お米のクイズを行い、収穫したお米を小学生に一kgずつ持ち帰っていました。

食育学習では、生徒達の指導力やコミュニケーション能力の向上といった目的に加え、地域農業理解、環境学習、食の学習も含めた内容で取り組み、食の安全と地域理解について生徒自身が調査し、学習を深める機会となっています。

また、この食育学習では新十津川町教育委員会の協力もあり、収穫されたヤーコンやサツマイモ、お米の他、本校で収

穫した野菜類やジャガイモ、スイートコーンは町内の給食センターで活用され、町内の小・中・高の給食メニューに利用されています。

■ その他の活動

食物専門分会では、令和元年度、小学生と栽培してきたヤーコンをはじめ、本校の農産物や新十津川産にこだわった農産物を活用して、社会福祉法人明和会の協力をいただきながら、「新農ファミリー食堂」も開催しました。開催にあたり、食事のメニューを一つにしぶり、一・五食限定ではありましたが、事前に食券を販売し一日だけの食堂を開催することができました。運営した生徒達はメニュー作りから開始して、家族の笑顔に達成感と充実感を得て、次回の開催に大変な意欲を持つことができ、大きな成果と課題を学習することができました。新型コロナウイルスの影響で、現在は実施できてい

ませんが、落ち着けば再開をしたいと考えています。



また、四年前に中山間地域の過疎化対策事業の一環として、地域の農業者と本校生徒が連携してイベントや交流の機会を設け、過疎化地域の活性化を目指した話し合いの中から、地元農業の魅力の発信と高齢農業者でも容易に参加できる新

規作物の導入として、「食用ほおずき」の栽培を始めました。

三年前には、食用ほおずきの会が発足され本格的に本校、徳富地区農家の方々との交流が始まりました。初年度は、ほおずきの苗を本校で生産し苗の供給を、一年目からは本校でも本格的に栽培を開始し、ほおずきの栽培交流を展開してきました。

水稻専門分会の生徒がこの活動に参加しており、ほおずき生産と水稻栽培の交流学習を行っています。令和元年度は、徳富地区農家の稻作栽培とほおずき栽培の視察学習を実施して、水稻生産の現状とほおずきの生産状況を学習し、学校での実践に大いに活かしています。交流開始当初から毎年十一月に徳富地区農家の方々と交流会を実施して、ほおずき生産に限らず、幅広く意見交換を実施しています。この一年間は新型コロナウイルスの影響で、参加していませんが、道府赤

レンガフェスティバルにほおずきの会のみなさんと一緒に参加して、新十津川町の農業の魅力や食用ほおずきの魅力と一緒に発信しています。

今年度は生産に加え、ほおずきの加工について取り組みを開始して、ほおずきの会の方と加工品開発の共同研究が、本



三 おわりに

これからも中空知、北空知の農業と食を担っているという自覚と責任を持ち、次世代の農業や農業に関わる産業を支えられる人材を育てるために、現状に満足することなく新たな知識や技術を積極的に取り入れながら地域社会に貢献できるよう、関係機関との連携を充実させながら教育活動を推進していきます。

… …

執筆・写真提供は、教諭 保木本敬一先生にご担当いただきました。

格的に開始されます。今後のスケジュールを確認し、食用ほおずきの認知度を高めること、食用ほおずきの付加価値を高めるための研究をこの冬期間に進めいく予定です。

収穫・仕込みを終え、残るは剪定

登醸造 小西淳子

まさかの九月収穫ならず

前回の原稿は、出荷先のワイナリーに醸造用ぶどうのサンプルを送り、収穫を始めるゴーサインを待っているというところで終わりました。気温が高く晴天が多くなったことから糖度の上りが早く、まさかの九月収穫になるのか!?と書きましたが、結果はそうなりませんでした。収穫が始まつたのは一〇月上旬で、しかもその後の熟しが予想以上に緩やかだったため、ワイナリーの要請で一旦収穫を休止しました。五日ほど待つて収穫を再開しましたが、ぶどうの様子を見ながらゆっくり収穫することになり、結局、自家醸造用のぶどうも含めて収穫が終わったのは一月上旬でした。これは例年と一週間も違わない日程で、早い早いとあれだけ騒いだのは何だったのかと思います。

今年の収穫を通して分かったことは、糖度が上がることと熟すことはイコールではないということです。夫も私もぶど

うが熟すということがどうこうことなのか、はっきりと理解していませんでした。糖度が一度を超えたので、もう収穫しても大丈夫だろうと判断していたのですが、出荷先のワイナリーは熟しがいまひとつだと感じていました。時間が経つほどぶどうの病気が増えて収穫に時間がかかり、収量も低下するので、私たちとしては早めに収穫したい思いがあります。ワイナリーから収穫休止の要請を受けたとき、正直、どうしてこのぶどうではダメなのかと不満に思いました。でも、その後、収穫しながらぶどうを食べて変化を観察すると、皮の味が変わってくるのが分かり納得しました。言葉で聞いていた熟すということがようやく実感でき、とても勉強になったシーズンでした。

アルバイトとの交流が楽しみ

今年は収穫のために学生アルバイトを募集しました。多い日は八人ほど集まり順調に収穫していましたが、途中で収穫

が休止になり、その後も人手が必要なくなってしまったので、予定していたアルバイトを断る結果になりました。農業サークルに所属する大学生に声を掛けていたので、「農業は天候などで状況が変わるので理解している人たちだから大丈夫」と取りまとめをしてくれた学生が言つてくれたのですが、予定が変わってしまつたことは申し訳なく、アルバイトを募集する難しさを知りました。天候も関係してはいますが、私たちが、ワイナリーが求めるぶどうの状態を理解しておらず、先走っていたのが大きな要因だったのです。今後はこういうことのないようにしたいと思っています。

短期間ではありましたが、学生がアルバイトに来てくれたのはありがたく、楽しい時間を過ごすことができました。アルバイトは一昨年頃からお願いしていませんが、初めはどう接してよいのか分からず、とても緊張していました。徐々に慣れてきて、今は逆に楽しみになつてきました。人数が多いときはお昼にお弁当を

頼みますが、一人くらいなら私がお昼を作ります。これが意外と好評ですっかり気を良くしたこともあります。

今年來てくれた大学生たちはコロナの影響をガッカリ受けていて、中には今二年生なのに入学してから四回しか大学に行つていないという人もいました。私くらいの年になれば、毎日何の変哲もない感じで過ぎていきますが、若い時の時間はすごく貴重です。いろいろ経験できるときにコロナに当たつてしまつたのは氣の毒でなりません。それでも授業がリモートなのを利用して、逆に自分のやりたいことをしている人もいて、なかなかたくさん心がけました。学生の話を聞くと、直接の交流を求めていることがひしひしと

小西淳子さん

1974年愛知県生まれ。
大学院卒業後、酪農専門雑誌の記者として働く。
2011年に夫と共に北海道余市町で新規就農。

醸造用ブドウ1.9ha、サクランボやプラムなどの果樹0.3haを生産する。
2014年にワイナリー「登醸造」を立ち上げ、ワインの製造・販売を開始。
夫と猫1匹、羊3頭とともに暮らす。



来年は絶対大丈夫！

春から夏にかけて今までにない好天に恵まれましたが、秋に雨が降り結局収穫時は灰色カビ病が多発してしまいました。病果を落としながら収穫していると、毎年この時期に夫の口から聞かれるあの言葉が今年も出ました。「来年は絶対大丈

ばいに来てくれたのはありがたく、楽しい時間を過ごすことができました。アルバイトは一昨年頃からお願いしていませんが、初めはどう接してよいのか分からず、とても緊張していました。徐々に慣れてきて、今は逆に楽しみになつてきました。人数が多いときはお昼にお弁当を

夫ー」。もー、耳にタコができます。

「来年はー」というのは、うちの夫だけではなく、秋になると多くの農家が口

にするように思います。そういう私もササゲについては今年の作業がまだ終わっていないのに「来年は」と言ひ出します。いろいろ失敗してしまったことがあります。悔しさとその場を切り抜ける言い訳として、つい出てしまう言葉です。来年はこうしよう、ああしようと話して気分を明るく保ちつつ、思い通りにいかなかつた今年の作業をせつせと終わらせます。

醸造用ぶどうは灰色カビ病を減らすことが一番の課題です。「来年は絶対大丈夫!」の根拠として、夫は樹勢を落ち着かせるために萌芽前に根切りをすること、農薬がしつかり実にかかるといい疑いがあるので散布方法を変えることなどを考へているようです。いくつも新しいことを試すとどれが効いたのか分からなくなリそうですが、できることからチャレンジしていきたいと思っています。

文明の利器は素晴らしい

自家醸造用のぶどうは、皮ごと漬けて発酵させる赤ワインの作り方と、搾って果汁だけで発酵させる白ワインの作り方の二パターンに分けて仕込んでいます。

赤ワインの作り方では病果が入ると発酵に影響するため、きれいに取り除く必要があります。一方、白ワインの作り方は多少の病果は許容されます。できるだけ廃棄するぶどうを減らしたいので、まず病気の少ないぶどうを選んで赤ワインの作り方で仕込み、残った病果が多めのぶどうを白ワインの作り方で仕込むようにしています。

赤ワインの作り方では、収穫したぶどうを除梗機にかけて軸をはずし、粒だけにしてタンクに入れます。除梗するときに皮が破れて果汁が出るので、タンクは粒が果汁に浸った状態になります。しばらくすると発酵が始まり、三週間ほどそのままにして皮のうま味などを抽出しま



ブレンドして貯蔵中のワイン

す。発酵が完全に終わる前に搾汁機で搾り、果汁だけにして再びタンクに入れます。白ワインの作り方では、収穫したぶどうをそのまま搾汁機で搾り、果汁をタンクで発酵させます。その年の一二月頃に赤ワインの作り方のものと白ワインの作り方のものをブレンドし、再びタンクで翌年の夏まで貯蔵します。九月頃に瓶詰し、さらに半年寝かせて次の年の二月に発売します。

今年から新しい搾汁機を導入し、醸造作業がだいぶ楽になりました。搾汁の仕方はかごにぶどうを入れて上から圧力をかける方法で今までの搾汁機と同じですが、圧力を手動でかけるか電動でかけるのかが違います。電動は力がいるので労力が軽減されることと、搾汁にずっと人が付いていなくともいいので時間を有効に使えるのが魅力です。今まで私たちのワイナリーには電動の機械がなかったので、「ノンエレクトリック」で作っています」とそれらしいアピールをしていましたが、今は「電動万歳!」。文明の利器の素晴らしいを感じています。



手動の頃の搾汁風景

枝引きと巻きひげ除去を組み合わせて体が冷えないように作業します。巻きひげ除去は、かなりきれいに取れる自信があります。何年かやるうちにコツをつかみました。(この技術が他で役立つことはおそらくないと思いますが、続いているどんなんことも上達するものなのかなと思

まさひげ除去ならお任せを

ワインの仕込みが終わると、残るのは醸造用ぶどうの剪定作業だけです。剪定は夫が担当し、私は切った枝を針金から外す枝引きと、ぶどうの巻きひげの除去をします。終了目標は一二月一五日なのですが、今年は少し遅れていてクリスマス前に終わればいいかなと思っています。雪が積もって寒い中での作業です。枝引きは力技なので体が温まりますが、巻きひげ除去は手がかじかんできます。巻きひげ除去だけを長時間するのは辛いので、枝引きと巻きひげ除去を組み合わせて体が冷えないように作業します。巻きひげ除去は、かなりきれいに取れる自信があります。何年かやるうちにコツをつかみました。(この技術が他で役立つことはおそらくないと思いますが、続いているどんなんことも上達するものなのかなと思



剪定後、針金に残った枝を外し、巻きひげを除去する

このたびは貴重な機会をいただき、ありがとうございました。一年が経つのはあつという間だなと思います。これからも夫と一緒に楽しくワインづくりを続けていきたいです。

いました。巻きひげ除去も病気を減らす一助になるので、地味な作業ですが頑張つて終わらせたいと思います。

研究所
だより

モニターア会議概要

現地モニター（敬称略・五十音順）

- 美瑛町 内田達也
(JJAびえい青果課)
- 天塩町 宇野剛司
(酪農経営)
- 新篠津村 大塚早苗
(有機野菜・畑作・稻作経営)
- 美唄市 貞広樹良
(稻作・畑作経営)
- 京極町 高木智美
(畑作経営)
- 音更町 津島朗
(畑作経営)
- 名寄市 中野康則
(稻作・野菜経営)

一般社団法人 北海道地域農業研究所

近藤

本日は大

変お忙しい

中、モニタ

ー会議にご

出席をいた

だきありが

とうござい

ます。今回

のモニター会議は一〇回目の開催となり

ます。これまでモニター委員の皆様方

からは経営の状況や地域の状況、「これか

らの課題・展望などいろいろ意見を頂

戴し、私どもの研究業務に活かさせてい

た"だいています。本日は皆さんのが農の

中での課題、そして今後考えておられる

こと等を中心にご意見、声を聞かせてい

ただき、当研究所会報の『地域と農業』

で広く紹介させていただきたいと考えて

おりますので、よろしくお願い致します。

今後の進行につきましては坂下所長にお

願いします。

当研究所では、現地の実態を的確に把握し業務推進に活かすため、新進気鋭の農業者に現地モニターを委嘱し、さまざまご意見をうかがう場を設けています。

本年度は、令和三年十一月一七日にコロナウイルス感染予防のためリモートでの意見交換を行いました。以下その概要を紹介いたします。



近藤専務

坂 下 本日の内容ですが、初めにそ

れぞれの経営についての今年の様子や新しいチャレンジについて伺い、次に一年田になつたコロナに対して、農村ではどのような状況となつてゐるかをお伺いします。それではまず今年の営農について、名寄の中野さんからお願いします。

中 野 私はもち米を一〇㌃と二㌶トマトを一反半ほど作っています。もち米は今年の天候のお陰で一〇俵以上取れましたが、ミニトマトは夏の高温で花芽が落ち、九月上旬頃の収穫量が激減してしまいました。今年はもち米のプラスとミニトマトのマイナスで、去年と比べてプラスマイゼロかなという感じです。

例年ミニトマトでジュースを作り、東京に売りに行っていましたが、去年も試飲販売や直接販売ができず、今年も緊急事態宣言は解除されても試飲・試食販売は自粛しているし、道外への対面販売は断念しています。そのせいで売上が

大分下がつてしまつてゐる状況です。

また、観光協会とも協力して、コロナ前まではインバウンドの人や農業体験したい人を受け入れていましたが、去年と同様今年もそういう人たちがなかなか来られなくて、ちょっと苦戦しています。

坂 下 中野さんは茅ヶ崎から移られ

てきて、東京の方にも知り合いがおられるということですが、このコロナ禍でそういう友達関係などはどういう影響を受けていますか。

中 野 私は農業を始める前は飲食関係の卸会社にいたので、飲食関係の知り合いが大勢います。コロナのせいで飲食を辞められた方もいますし、売上が下がつてしまい、借入をして返す日途が立たず大変な思いをしているという話も聞いています。私たちも農産物を作っていますが、飲食、業務用食材として提供できな

てゐるのかは不透明な部分があります。

坂 下 ありがとうございます。続きまして天塩の宇野さん、お願いします。

宇 野 今年は干ばつがひどかつたです。天塩も七月から八月にかけて一ヶ月半くらい雨が全く降らなく、畑の草が皆枯れてしましました。こんなことは多分僕が生まれてから初めてです。春先の干ばつは今まで何回かありましたが、夏にこうなるとは今まででは考えられません。留萌管内でも小平町の気温が道内一高いところで何度も言つっていましたし、本当に今年は異常な気候でした。

春先の一番牧草は、それほど問題なく充分収穫でき、乾草も好天だったので良いものができましたが、二番牧草はほぼ全滅に近い状態でした。デントコーンも悲惨な状態で、ほぼ伸びない。伸びても茎がすごく細く、赤くなつて食べられる状態ではない。そのため刈り捨て

ていいよつ
などいつも
けつこうあ
りました。

普段水が溜
まってしま
うような水
はけの悪い
草地の方が
ある程度育

ち、逆に普段水はけが良くて収量も期待
できるような草地はほぼ全滅でした。そ
れくらい干ばつがひどかったです。

自社についてですが、去年からチーズ
工場を作る計画を立てていたのが、今年
になりやっと動き出しています。でもコ
ロナの影響で資材納入が遅れています。
機械はいろいろな国の中ものを買っており、
ハンガリーのものはもうすぐ届く予定で
すが、フランスのものは船がいつ出るの
かもわからない状況です。予定より大分
遅れて、来年の春先くらいによつやく出



宇野剛司さん

来上がるかなと思います。資金繰りの面
ではひと手間かかるかなと思つてします。

それと、今年から試験的にオーガニッ

クのグラスフュットビーフを商品化しよ
うとしています。僕も年を取ったせいか
和牛の脂が体に合わなくなつてきており、
自分でも美味しく食べられる赤身の肉を
作りたいと思いました。前々から遊びで
何頭かは肥育していたので、それを屠畜
して今年から試しに出している段階です。
前にコープさつぽんさんの「畑でレスト
ラン」で、六歳か七歳の経産牛を屠畜し
たものを、そのままでは間違いなく固い
だらうということで、一ヶ月くらい「ドラ
イエイジング」して提供しました。「ランプ
トリブロース」だったと思いますが、「ドラ
イエイジング」をやつたおかげで赤身にし
てはかなり柔らかい感じになり、「餌が草
だけだったからか、お客さんからも「牛臭
さがない」「もともと牛肉はあまり好き
ではない」と連絡が来たけれど、「これは普通の牛肉
と違つて美味しく食べられた」という好

意的な反応をいただきました。ウェット
エイジングにするかドライエイジングに
するとか、今回は一ヶ月しか熟成して
いないけれど次はもっと長くしてみると
か、餌と熟成の違いの部分を今後いろいろ
試してみようと思っています。海外では
は一二〇日熟成というのもあってかなり
高額なようですが、このあたりをいろい
ろ試してみると面白い肉ができるのではないか
と思つています。牛もうちにはホ
ルスタイン、ブラウンスイス、ジャージー
がいるので、いろいろ取り組んでいふと
ころです。

あとは、今年の春に新しい会社を作り
ました。去年もお話したと思いますが、
ドローンとA-Eを使って草地の状況を判
断してスマート酪農をやるという話があ
り、その最終的なシステム開発を別会社
でやることで取り組んでいます。その会社では今、離農したいという空知
の酪農家さんと土地を交渉中で、そこに
新しい牧場を作り、眺めが良いところな

のでシステム開発の場だけでなく、観光もできる牧場にしたいと考えています。土地の話が決まれば、来年度には生乳生産と乳製品加工、それから飲食のできるスペースに宿泊施設もあるような牧場を作りたいと考えています。以前、JRA の元調教師で、引退した競争馬が行き場がなく年間三、〇〇〇頭以上も殺処分されているのを助けたいという活動をされている方との出会いがありまして、その馬たちも預かって余生を過ごせる場所を提供し、乗馬やちょっとした観光ができるような形にできないかと思っています。

その空知の土地は草地が一、一〇 ha あり、うちにも二、三〇 ha くらいの草地があるので、うちの方でも引き取つて馬たちに余生を過ごさせてあげられればと思い、今計画を進めています。

坂 下 なかなか意欲的なお話を伺いました。最近は草地に木を残しておらず、今年のように一ヶ月半もカンカン照りに

なると放牧も大変かなと思います。(こいつ)ことがあった時こそ、牧場全体のデザインを考え直すきっかけになるのかなとも思いますか、その辺りはいかがでしょうか?

宇野 今年の夏場はあまりにも暑かつたので、牛も基本的に昼間はほとんど草を食べられません。それで、日中は牛を樹木とか日陰になるところがある草地に出し、夕方からは食べられる草のある草地に出てしてどう、干ばつ時限定の管理をしてしました。

坂 下 ありがとうございました。では次に美唄の貞広さんお願いします。

貞 広 今年の美唄は大雪に見舞われてうちの農業倉庫が潰れてしまい、知り合いの所でも何棟も被害があり、さらに農協の倉庫も潰れてという状況で、まずその片付けが大変なスタートになりまし

た。

農業の方は、今年の作付けは米が一八 ha と麦、ソバ、大豆、菜種で三〇 ha くらい作っていますが、雪が多かった割には春先の雪解けも早く、作業自体はそれほど遅れずスタートできました。やはり水不足と夏の高温の影響がけつこうあります。大豆の発芽が悪く、収量に影響するくらいでした。あとはトウモロコシが水不足のため小ぶりなものしか取れなかつたという状況です。米とサツマイモは収量も品質も今までにないほどよかったです。思いますが、米価が非常に安いので最終的な収支はマイナスになるのではないか

要は少しずつ戻つてくるのではないかと思つています。

私の所では消費者を呼んで味噌作り体験を毎年やっていますが、コロナが始まつてからは体験はやめて、うちで作つたものの販売だけにしました。やはり米とか味噌とか、家庭で消費されるものについては順調に販売できているかなと思います。

坂下 味噌作りは工場のような形で大規模にやつているのでしょうか。

貞広 加工場ですが、それほど広くはありません。例年だと一〇人くらいの消費者と、味噌を詰める体験などをやっていました。

坂下 ありがとうございます。次はこゝへびえいの内田さんお願いします。

内田 やはり皆さん同様高温・干ば



内田達也さん

つの影響がありました。宇野さんのお話にもありました。道北はかなり酷くて、美瑛でも大分被害がありました。特にブロッコリーとスイートコーンは収穫を一部断念した圃場もあり、生産者はけっこう苦労していました。品質面で言いますと、トマトは夏場での量はありますと、軟化玉・裂果玉など例年に比べ廃棄しなければならないものが多く、厳しい販売環境でした。また、ブロッコリーも変形や黄変等が見受けられ、スイートコーンは貞広さんも仰っていた通り、俵が小さく、不穏のものが多く見受けられました。

坂下 ありがとうございます。次に京極の高木さんお願いします。

高木 やはり皆さんと同じように、干ばつの影響が避けられなかつた一年だつたと思います。けれど今年は農産物の味はすこく良かつたです。凝縮されたようなというか、男爵も身が締まっていて美味しいし、ブロッコリーも味が濃い。ただし、収量については、バレイショは小さかつたので、あまりありませんでした。ニンジンは収量は悪くなかったのですが、十勝やオホーツクの豊作で、市場価格が

いで一次成長が多く、また発芽が早くして品質面ではかなりダメージが大きく市場からもクレームも多いといつ状況でした。農産では米も小麦もありますの出来ですが、収量はよかつたのではと思います。コロナよりも、高温・干ばつで苦労した一年でした。



高木智美さん

が、今回
はやり甲
斐の方だ
つたなど

下がっている状態でした。小麦は質も量もそこそこよかったと思います。小豆は赤いのと白いのを作っていますが、赤い方は今年も観光がためで人の動きがないこともあります。在庫が掃けず、価格が上がりません。白い小豆はやっと今日出荷できました。白い方は作っている人も少ないのですが、手はつき、価格的には安定しています。来年は白い小豆の作付面積が赤い小豆をついに逆転してしまった予定です。

農業女性のグループで企業とのコラボがあり、いろいろな農作物を持ち寄って加工品を製造・販売する試みをしました。こういう取り組みはやり甲斐か労働対価かどちらかだとなど思っていました。

（笑）。そういうことのまとめ役として動いた一年でした。

それと、チャレンジ的にはまだまだなのですが、自分のところの畑を農地転換して個人的にキャンプ場をやりたいと考えています。川も近いという立地条件と、羊蹄山の景色が最高にいいところなんです。

街灯がないので、星空が本当に綺麗です。今キャンプブームだからというわけではないですけれど、やはり、人を呼ばないと地域にお金が回らない。地域に一番お金を落とせるのは人を呼ぶことだと思っていて、そういう面でも良いかなと。実現するかはわからないけれど見積りくらいは出したいと思っていて、皆の加工品なんかもそこで売れたらいいなとか、そういうことを考えてこの冬は過ごそうと思っています。

坂 下 ありがとうございます。では新篠津の大塚さんお願いします。

大 塚 うちは昨年農福連携の認定をもらひ、その補助事業でハウスを九棟増やしました。もともと七五mのハウスが五〇棟あったところが五九棟になったので、株数もミニトマトだけで三万株ぐら

いまで増えました。私としては収穫しきれるのが、売りきれるのかということが少し心配なシーズン入りでした。農福連携であり、福祉事業所の方たちが毎日来て農作業をしてくれます。四～五カ所くらいの福祉事業所の方たちが、一チーム五人くらいで来ててくれて、ミニトマトの収穫やハウス内の草取りをしてもらい、

今の時期であれば切り干し大根の袋詰めなどをやってもらっています。何年も前からやっていますが、今年は認定が取れたこともあります。今年は認定が取られたこともあり、いろいろなチームがたくさん来るようになりました。やつてみると難しいこともやはりありました。例えば一番困ったのが福祉事業所の職員の方が代わってしまうことです。職員の方が代わると、障がいの方のメンバーは

代わっていなくてもうまくいかないことが多い、うちのパートさんが代わった時と同じくらい大変です。うまく仕事の内容を皆さん伝え、働いてもらえるようにするのに苦労しました。今年はすこく暑かったのでハウスの中はさうに暑く、遮光もやっていますが、ミニトマトの収穫をやってくれている事業所から、「もうこれ以上は無理です」とお断りされてしまつたこともあります。「本当にシーズン終わりまで行けるのか?」と思つたりもしましたが、何とかやり切つたという状況です。

夏の暑さで花芽が落ちたというお話を先ほど中野さんも仰っていましたが、うちも九月上旬に一時ミニトマトが全然取れない時期がありました。その後復活しましたが、ハウスが九棟増えたにもかかわらず、最終的な収量は前年よりわずかしか増えませんでした。野菜は二二二品目ほど作っていますので、良かつた野菜、悪かつた野菜いろいろありました。二

ンジンは種をまいた後干ばつで全く発芽せず全滅でした。サツマイモは四町ぐりい作っていますが、収量も味も良くて、意外に干ばつに強いのかなと思いました。冬に干し芋の加工をやっていますので、サツマイモの収量が少ないと冬の仕事がなくなり困りますが、豊作だったのに非常に助かりました。

外国人技能実習生が去年は入つてしまったこともあります。「本当にシーズン終わりまで行けるのか?」と思つたりもしましたが、何とかやり切つたという状況です。

夏の暑さで花芽が落ちたというお話を先ほど中野さんも仰っていましたが、うちも九月上旬に一時ミニトマトが全然取れない時期がありました。その後復活しましたが、ハウスが九棟増えたにもかかわらず、最終的な収量は前年よりわずかしか増えませんでした。野菜は二二二品目ほど作っていますので、良かつた野菜、悪かつた野菜いろいろありました。二

ンジンは種をまいた後干ばつで全く発芽せず全滅でした。サツマイモは四町ぐりい作っていますが、収量も味も良くて、意外に干ばつに強いのかなと思いました。冬に干し芋の加工をやっていますので、サツマイモの収量が少ないと冬の仕事がなくなり困りますが、豊作だったのに非常に助かりました。

大塚 その紹介によるものではないですが、一般的な会社員の方が直接お手伝いに来てくれたというものです。

坂下 新しい動きですね。では音更の津島さんお願いします。

坂下 「バラレルノーカー」は、JA北海道中央会や農協がいろいろ宣伝していますが、そういう関係の方ですか。

津島 個人の経営の部分と地域の部分を少し混せて話したいと思います。畑の経営面積がジリジリ、ジリジリと周りを含め増えてきてるので、どうしようかなと思っています。法人化も考えてはいるのですが、今のところ個人でやっているので、個人経営路線でどんなふうにやれるのか思案しています。たとえば、どうすれば極力労働時間が減らせるか。省力化できるものは省力化し、簡単に、楽にやるにはどうすればよいか。移植であつたてん菜を五〇%直播にしてみるとか、主流にやつてある加工用スイートコーンの収穫は委託収穫です。ニンジンはすでに農協での収穫であり、小麦も地域の

集団で共同収穫が柱です。あと大豆も三年前から大型コンバインを二軒で購入し、委託もやりながら共同でやっています。どちらかと言うと、機械投資をして、いかに人を使わないでやっていくかという流れに確実にシフトしてきたかなと思います。小麦の播種もパワー・ハローの後ろに麦のドリルを載せてコンビで播種するという形です。あとは肥料さえ撒いておけばいいので、畑には一人で行って撒いてきたという人も出てきました。一人でいろいろな作業をやり切るようなスタイルが徐々に出てきていると思います。

皆さん

津島 朗さん



津島 朗さん
いろいろな作業をやり切るようなスタイルが徐々に出てきていると思います。

どの反収の差が出ました。金時はほとんど全員が等外です。高温で花が落ちて一次成長が起き、まともなものがほとんどないという状態ですが、十勝全域に亘つてそんな状況でした。小豆は最低の人は一俵、最高の人が六俵ということで、同じ町内でも畑ごとにそこまで違う。バリショモ、反収が一〇俵の人から六〇俵の人までいる。大豆は概ね五俵から七俵といったところで豊作でした。てん菜は干ばつ被害で二次成長した人たちの出荷が完了していないので最終的な収量はまだですが、反当り一〇㌧の人もいるということで、十勝全体としては恐ろしい大豊作の数字が出そうです。

その中で、機械化していくといふ人と野菜にシフトしていく人がそれぞれ増えてきています。後者だとネギ、ニンニク、サツマイモなどを始めたりしています。農協では、今はまだ試験的な段階ですが、加工用ブロッコリーの機械収穫に向けた機械の開発を始めました。ま

た、コーネングリッツはどうかなど、あちらこちらの先進的などいろいろ取り組んでいます。はっきりと国が「基幹作物はきちんと守る」と言ってくれればいいのですが、そうでもないので、あれこれと不確実なものに投資が進んでしまう可能性があると思っています。

坂下

小豆は土壤の管理とか、基本的なところで差がついたのでしょうか。

津島

今年については人や管理の差ではなかつたです。やはり一ヶ月半も雨

が全く降らず、花の時期に三五・三七〇という高温も続いたので完全に花が落ち、その後の雨で二次成長してしまった。ひどい話ですが、まだ小豆の収穫が終わっていない人もいます。黒土が深く作土が良いところは高温の時にも全く影響を受けず、そういう畑の人は六・七俵という数字になりました。一番ひどかったのは石の多い焼ける地帯。一番田に粘土地帯。

農協との話の中でも、「個人的に大変な人がいるね」と書いたり、「いや個人じゃない。畠だ。完全に畠の差が出た。」と言われました。そういう恐ろしい年でした。地元の中では、先祖や親がどこに入植したかの違いで、先祖を恨むか感謝するかまで言われています。

坂下 ありがとうございます。

今、一通りお話を伺いました。大変な年で、今年はさすがに良い話を聞けないのではないかとピクピクしていましたが、昨年からさらに進んでいる方や、夢を語られる方がおられて、大変心強く思いました。

地域農研でも「コロナ禍を契機とした新しい生活様式の構築－農村からの提言－」というテーマの自主研究も始めていて、これから三年ほど取り組む予定です。今は都市での生活がギリギリの所まで行ってしまい、生活を改善していくことが必要じゃないかと感じています。基

本的に都市では職場と住まいが分かれていて、生活と労働が別々になっているわけです。それに対しても農村は仕事と生活が、時間は分かれているけれども同じ場所、同じ枠の中でやられている。その農村の良いところを都市に対して何か発信できないかという思いがあります。

コロナに関して、例えば外国人技能実習生が来られないため別の形で労働力を確保しているとか、去年ともまた違う対応がいろいろ出てきていると思います。コロナ禍に関して何か思うところをもう一回りお話ししただけれどと思います。ではまた中野さんからお願い致します。

中野 私は新規就農して今年で二〇

年あまりになり、土地の借金もあと九年くらいで終ります。これからについては規模拡大というよりも、東京の人との繋がりがあるので、それを活かした形で何かできないかと考えています。

今から三年くらい前にゲストハウスを

建て、キャンピングトレーラーを三台買いました。なので、高木さんの先ほどの「キャンプ場と観光」という話をすく興味をもって聞いていました。コロナの前には「ワーケーションで受け入れ」という話もありましたが、コロナのせいで全部そういう話が吹っ飛んでしまいました。先ほど、「これからは新しい考え方で、農村の出番だ。」と坂下先生が仰っていたのはまさにその通りで、これからの一〇年間はもう少し農業体験などに力を入れて、農村の楽しいことを伝えていきたいと思っています。新規就農者として、東京の人達とのつながりの中で「農村は実はこうなんだ」という話ができると思うので、そういうことを伝えていきたいと考えています。非日常を味わうために農村に来て欲しいのです。ビジネスホテルでは非日常が断絶されてしまうからキャンピングトレーラーやゲストハウスを作ったりしました。東京から来る方



中野康則さん

は皆さん喜んでいただけ、「また来たい」と言つて下さいます。コロナで今はそういうことは大々的にできないのですが、アフターコロナに向けてそういう動きもしていきたい。将来的にはドッグランを作るなど、何か都会の人にも喜んでもらえそうなスタイルで都会の人たちを呼びたいと思っています。水稻のもみ焼き・田植え仕事は人手のかかる大変な仕事でもあり、そういう時の人材確保という意味でも、自分が力になれれば良いなど考えています。

購入したキャンピングトレーラー二台の内一台は、エアストリームを買いました。それをキッチンカーにして、道産農

産物で料理したものを東京のマルシェスペースや老人ホーム、イベントで提供し、私の視点での北海道のアピールを府県の人に発信するということを将来仕事にしたいと思っています。また、私のところにも将来的にはキャンピングカーの人を受け入れたいと思っています。今キャンピングカーがこれだけ普及しているにもかかわらず、キャンプ場しか受け入れ先がないとも聞いています。欧州では、郊外よりもむしろ街の中にキャンピングカーを停めて、そこで寝泊まりしつつ街の中に買い物や食事に行くそうです。農業とは少し話が変わりますが、キャンピングカーがこれだけ普及してきたのだから、受け入れ先もそのように整備できないかという思いが私にもあります。その中で、農家には土地もあるので、キャンピングカーで回る人を受け入れて農作業を手伝つてもうつなどの新しいつながりができると面白いと思っています。キャンピングカーに乗っている人は、第一次産業に興味が

ある人も多いので、そういう人たちも呼び込めると思います。キャンピングカーで府県から来た人たちが、あちこちの農家に泊まれるようになり、「ゴミやトイレの問題が解消できる農家さんマップなどができると、「なんだか面白い」とやっている」と人が集まるようになり、何か新しい価値のよくなものができるんじゃないかと思います。

坂下 ありがとうございます。実は私もキルギスから「ユルタ」という遊牧民の円形のテント、中国では「パオ」と言いますが、それを輸入して栗山の家の横に建てたのですが、皆が面白いと言つてくれています。キルギスの遊牧の文化を紹介したいと考えていますが、そういう「人が来られるような仕組みを作る」ことは面白いなと思っており、大変共感しました。

中野 ただ東京の人からの提案を受

け入れるのではなく、東京から来る人が喜ぶよつなじことをいかにからどんどん提案するなり、いかに農家の人も向こうへ行き、直接お客様に伝えるといふ、都会と農村の相互交流が非常に大事かなと思っています。

坂下 ありがとうございます。では宇野さんお願いします。

宇野 やはりコロナの影響で、百貨店での販売はいまだに悪い状態が続いている。また、イートインでその場で飲み食いする人も、去年より減っているかなと思います。反面、商品を買い求める方はしっかりといるので、物販自体はそこまで落ち込むことはありませんでした。とにかくイートインが減ってしまったという印象が強いです。スーパーでの売上は増えています。個人店というより、全国のスーパーでのフェアもけつこなっていますし、常設展もあるので、それから

への卸売りは大分よくなつたかなと思いります。ネットは去年から変わらずよく売られています。でも、うちのカフェにはお客様さんが全然来ません。ようやく緊急事態宣言が解除になり、少しづつ動きはありましたか、元どおりというにはほど遠い状態です。カフェには、まだまだあまり期待できないかなと思っています。

卸向けでは、ソフトクリーム原料が、キャンプ人気もあり、キャンプ場での販売需要としてすぐありました。反対に、今まで一番よく売れていた道の駅はあまり動きが良くなかったです。人の流れは、キャンプ場へといつことがよくわかりました。そのような状況で、うちの商品の売り上げは前年と比べても良くはないのかなと思います。

坂下 ありがとうございます。では貞広さんお願いします。

貞広 ハロナに関しては、米価が下

がると言っていたので、今年の作付けの中の米は、半分を飼料用米として生産しました。元に戻るまでには何年かかると思いますので、しばらくは飼料用米を入れながらやっていかなければと思っています。

労働力の部分では、コロナとは直接関係はないですが、現在通年雇用で一人います。夏は少し手が足りないのですが、冬はそれほど仕事もなく、さらにもう一人増やすというのは難しい状況です。それでも、「北海道ベースボールリーグ」が一年目になり、地域球団の「美唄ブランクダイヤモンズ」の選手が四月から一〇月までの午前中のみ地域の企業で働くという仕組みになつております。うちもそこの選手一人



貞広樹良さん

に来てもらっています。今年は体格の良いキヤツチャーの人が来てくれました。実家が長野県の米農家で、小さいころから仕事を手伝っていたというところで作業にも慣れており、すこしく助かりました。収穫が終わる秋まで来てもらっていたので、最後はうちの新米を実家に送り、実家の新米をうちがもらつて食べ比べとい

うか味見をさせてもらいました。自画自贊になってしまいますが、北海道米も府県米に肩を並べるようになつたんだと実感できました。(笑)。

坂 下 ありがとうございます。で内田さんお願いします。

内 田 ハロナに関しては、去年ほど意識せず青果物・農産物を売つていました。米は皆さんのお話のとおり安くなりましたが、僕が担当しているバレイショウは、依然として飲食店・レストラン関係はダメージがあつたものの、加工業界、

特にチップ類は好調だったので、去年よりは落ち着いていたのかなと感じています。やはり、全道的な不作により物量がないので、一年通してバレイショを販売しますが、売る方も買う方も大変な年になつており、来年の豊作に期待するしかありません。

坂 下 ありがとうございます。では高木さんお願いします。

高 木 先ほど坂下所長も言われましたが、農村からの発信ということですが、実際にイベントを開催すれば来場した人達がその良さを発信してくれる」とも期待できます。ですが、インターネットによるショッピング方式の場合、自分たちの農産物を買つてもうつたために、皆さん方は、どんなことをどのように活用し発信しているのかが気になっていました。

私が、今年試してみたのはFMラジオの「A-R-G」にメッセージをガンガン

出すところでした。四月から毎日どつかの番組に一通はお便りを出しました。うちでは五勝手屋本舗さんとのコラボ商品で白小豆の最中を限定で売っていますが、それをA-R-Gに送つて食べてもらつて宣伝してもらひ。またA-R-Gから電話がくれば直接良さを伝える。そういうことを続けてリスナー仲間もできました。一般消費者の方達の声ですが、「農業のよさ」であるとか「商品のよさ」は聞いてみるとすぐわかるけれども、その機会がなかなかないと言います。私もそれほど大きくやっている方ではないですし、ホームページも作つていませんが、ラジオという媒体を使ってうまく宣传できたことが、今年一年試してみて面白かったです。けつこうリスナーには農家さんも多いことに気付きました。そこからまた、ほかの地域の情報も得るところができました。

坂 下 ありがとうございました。そ

れでは大塚さんお願ひします。

大 塚 観光や外食に関係のある取引先が少なかったので、あまり売上的には影響はありませんでした。今年はミニートマトをたくさん作つたとお話ししましたが、一品種ほど、いろいろな形や色のものを作つています。「ロナ前は、スーパーの店頭で「ミニートマトバイキング」というものがありました。それもローラーでなくなり、それに伴つて全国的にカラーミニートマトを作る農家が一気に減つてしまつたそうです。でも、うちはずつと作つていたので、その引き合いがずいぶん多くなり、それをきっかけに道外の取引先もすこく増えるという良い面があつたと思っています。

夏の間は、タイの国立大学からの留学生に四ヶ月間、四人くらい来てもらつ予定でしたが、昨年はダメになりました。その方たち向けて用意した寮が空いたの



大塚早苗さん

で、毎週末、金曜日の晩から北大生に泊まつてもいい、土日に畠でアルバイトをして日曜の晩には帰る

というように活用しています。うちは規格外野菜を札幌にある外国人交流センターに寄贈していますが、その外国人の方たちが寮に泊まり農作業を手伝つてもらうこともあります。先ほど「ワーケーション」のお話がありましたが、その寮は窓の外にリゾートホテルのような景色が広がつてますので、ワーケーションとして部屋を貸し出すということもあり

かなど考えています。

コロナ関係では、いろいろなイベントが全てなくなってしまい、会議もほとんどがオンラインになりました。そういう

深刻になっています。野菜への転換であるとかいろいろ話があります。でも、今まで米を作つていた農家が野菜を作り始めてしまうと、野菜が供給過多となり既存の野菜農家の経営を圧迫する懸念があるとも聞いています。ですから、米に変わるものとして何があるのかということも考えていかなくてはいけないと思つています。

坂 下 ありがとうございました。そ

れでは続きまして津島さんお願ひします。

津 島 ハロナ禍になつてから、地域

全体の「ミユニティ行事が一〇〇%なくなりました。農協の懇親会・会食も全てすつとゼロです。もともとそういうものが嫌いな人たちは「楽になつた」と喜んでいますが、それもどうかなと思つています。昨日のJHA北海道大会の中で僕の耳に残つたものは、「人づくりをどうするか」「対話によるもの」など、やはり人ととのつながり方です。ネット等で情報を聞いても、それはただの情報で終わつてしまひます。「人づくり」というのは対話により作られるものです。やはり実際に会わないと、雑談もなく、伝えきれないものが多々あり、早く元の対面する社会に戻らないとダメだと気づきました。

しほりの間は、仲間内での外食も行く行かないの葛藤があり、行つても何か悪いことをしているような気持ちになることもあつたため、外には出向かず、時々ピートのハウスに集まり焼肉をやつたり

していました。そんなこともあります、何かホームパーティーなどができるよつな、人が集まる」とのできるような家にし、皆で樂しくやることもいなど気付きました。遠くからたまたま友人が来て、帰るというのを引き留め、「たまにしか来られないし、外でも飲めないのだから、うちで飲んでいってよ」とお酒を出して泊つてもらつたよつな」ともありました。そういうことができるの農村だからであり、農業だからよかつたということを実感できる何かができるいいなと思つています。

先ほどの中野さんのようにキャンピングトレーラーを買つとかゲストハウスを建てるといふことでは、なかなか採算的にも難しいかなとの思いもあります。

いくつかベースになる作物があつて、それがきちんと営農していくけるといつ前提で、別に金儲けといふことではなく、農業の良さを伝える方法として、何らかの加工品を作るとか、皆が集まりホームパー

ティーをやるとか、そんな方法でもできることではないかと思います。いつもじつじを通じて、本当の意味での農業や農村の良さ、心の豊かさを伝える」ことができれば良いなと思います。現在は個人経営体が主ですが、その経営主が怪我などで農業ができなくなると経営は成り立たなくなります。そんな時には、まわりの地域の人たちがカバーし合うのです。最悪の場合には、まるまる一年にわたり経営主が復帰できるまで代わりに作業して維持することもできるはずです。それが共同体としての農村の良さだらうと思つて、そういうことが自然にできる地域の「ミユニティをきちんと維持する」ことが重要であると思います。

坂 下

ありがとうございました。日本全体で「ミユニティの維持が難しくなつてきており、農村も「過疎だから」と書いて諦めるよりは「都会の砂漠とは違つた」という意識を持ち、何か新しいことをやつ

ていればと思います。

今日お聞きしたところ、コロナのイン

パクトも一年目は相当大きかつたけれど、

今年は皆さん大分慣れてきているようですが。人つきあいなどはほとんどなくなつてしましましたが、「それで楽になった」と言つて居るだけで「いいのかな」という思いを感じています。

農村での付き合い方をこれからどのように作っていくかが、来年あたりの課題になってくるものと思います。



坂下所長

ターケーニングを

終了させていただきます。どうもありがとうございました。

近藤 皆さん大変お疲れ様でした。いろいろ前向きなお話を聞かせていただき、本当にありがとうございます。

最後に、皆さんにお知らせがございま

す。美唄の貞広さんは、今回をもってモニター委員を退任されることになります。最後に貞広さんありがとうございました。

近藤 ありがとうございました。
私たちの研究所は、いかに地域の農業の振興に貢献できるかというのが第一義的な使命であります。今後とも、研究所一丸となって取り組んでいきたいと思いまので、皆様方の一層のご指導をよろしくお願い申し上げます。

以上で、本年度のモニター会議を終了させていただきます。皆さんどうもありがとうございました。

貞 広 今回でモニター委員を退任し

ます。これまで長い間大変お世話になりました。皆さんから興味深いお話を聞かせていただき、大変勉強になりました。皆さんには、これからも農業の明るい話題を作つていていただきたいと思いま。地域農研の皆さんには、本当にこれまでお世話になりました。ありがとうございました。

今年も天候や農産物需給など厳しい面はありました。皆さんいろいろ新しいことにチャレンジされている状況をお聞かせいただき、大変力強く思った次第です。来年

こそは、直接お会いして話し合えることを祈念し、モニ

ターケーニングを

連載 わがマチの自慢 №.27

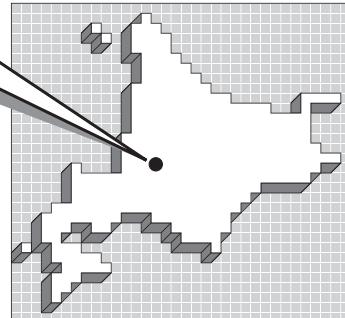
新篠津村

大都市近郊に広がる美しい田園を活かしてまちづくり



まるでプラネタリウム

村の人口は
ピーク時の
九六〇年には
五、五〇〇人
近くに達した
が、三千人を
切るまでに減
少している。



札幌市から車で北東へ一時間ほどの新篠津村は、石狩平野の西部、石狩川下流の右岸に位置し、東西八・七km、南北一四・三kmで、総面積七八・〇四kmの小さな村である。

土地は極めて平坦で石狩川右岸の一部、篠津川両岸の一帯を除きほとんどが泥炭地である。この泥炭地が耕地化され、現在では村の総面積の六六%が耕地で、その九割が田畠である。村の就業人口の四割以上が農業に従事しており、農業を基幹産業とするまちである。

世界銀行（当時は国際復興銀行）の融資を受け、一九五年から施工していた国営のかんがい排水事業を包含して、

一九五六六年から総合開発事業として本格的な水田整備に着手した。その基幹施設が篠津運河（篠津幹線用排水路）で全長二三km、石狩川頭首工（月形町）から取水し、排水

**豊かな水田地帯へ
『篠津地域
泥炭地開発』**

こうして新篠津村は、戦前の畑作から大規模な水田地帯へと変貌した。ただ、工事完成の時期がコメの生産調整の始まりと重なったことは皮肉な巡りあわせであり、コメは徐々に量から質が問われる時代に移っていく。

整備後も年数を経過するに従い水利施設の老朽化や泥炭路としての働きもして石狩川下流域（江別市）に合流する。本事業では、揚水機場・用水路や排水機場・排水路の整備、農道や橋梁の建設、暗渠排水、客土、防風林植栽、開墾なども行われ、一九七一年に完了した。かんがい排水事業の着手から一〇年の歳月を要し、二〇億円余りの巨費を投じた大工事であった。



篠津運河

こうして新篠津村は、戦前の畑作から大規模な水田地帯へと変貌した。ただ、工事完成の時期がコメの生産調整の始まりと重なったことは皮肉な巡りあわせであり、コメは徐々に量から質が問われる時代に移っていく。

整備後も年数を経過するに従い水利施設の老朽化や泥炭路としての働きもして石狩川下流域（江別市）に合流する。本事業では、揚水機場・用水路や排水機場・排水路の整備、農道や橋梁の建設、暗渠排水、客土、防風林植栽、開墾なども行われ、一九七一年に完了した。かんがい排水事業の着手から一〇年の歳月を要し、二〇億円余りの巨費を投じた大工事であった。

センサスデータからみた農業の構造変化

表1に新篠津村の農業構造の推移を示した。一〇一〇年の農業経営体数は二二三経営地特有の地盤沈下による機能低下に加え、代かき期間の短縮や深水かんがいに必要な用水の不足などに対応するため、国営のかんがい排水事業や道営等の各種関連事業が継続して進められており、揚水機場の統廃合による水管理の合理化や、水利施設の改修、水場の大区画化や客土、集中管理孔を利用した地下かんがいシステムの整備などが行われている。一〇一四年四月からは新しい石狩川頭首工による取水も始まっている。

表1に新篠津村の農業構造の推移を示した。一〇一〇年の農業経営体数は二二三経営地特有の地盤沈下による機能低下に加え、代かき期間の短縮や深水かんがいに必要な用水の不足などに対応するため、国営のかんがい排水事業や道営等の各種関連事業が継続して進められており、揚水機場の統廃合による水管理の合理化や、水利施設の改修、水場の大区画化や客土、集中管理孔を利用した地下かんがいシステムの整備などが行われている。一〇一四年四月からは新しい石狩川頭首工による取水も始まっている。

表1に新篠津村の農業構造の推移を示した。一〇一〇年の農業経営体数は二二三経営地特有の地盤沈下による機能低下に加え、代かき期間の短縮や深水かんがいに必要な用水の不足などに対応するため、国営のかんがい排水事業や道営等の各種関連事業が継続して進められており、揚水機場の統廃合による水管理の合理化や、水利施設の改修、水場の大区画化や客土、集中管理孔を利用した地下かんがいシステムの整備などが行われている。一〇一四年四月からは新しい石狩川頭首工による取水も始まっている。

表1に新篠津村の農業構造の推移を示した。一〇一〇年の農業経営体数は二二三経営地特有の地盤沈下による機能低下に加え、代かき期間の短縮や深水かんがいに必要な用水の不足などに対応するため、国営のかんがい排水事業や道営等の各種関連事業が継続して進められており、揚水機場の統廃合による水管理の合理化や、水利施設の改修、水場の大区画化や客土、集中管理孔を利用した地下かんがいシステムの整備などが行われている。一〇一四年四月からは新しい石狩川頭首工による取水も始まっている。

かなり高い方である。

農業経営体の経営耕地面積は四、七八五haで、田が八六%を占める。借入耕地面積は三七一haで借入率は七・八%となり、石狩管内平均（二六・一%）や全道平均（二五・〇%）に比べるとかなり低い。

経営耕地のある一経営体当たりの耕地面積は、五年前に比べ一・四ha拡大し二・五haとなった。米の主産地として道内有数の規模である。北海道農業公社の農地保有合理化事業を活用した所有権移転を主体に規模拡大が進んでいる。

経営耕地規模別の農業経営体数や経営耕地面積が特定の階層に集中していることも大きな特徴である。経営耕地面積規模別の農業経営体数は、

表1 新篠津村の農業構造の推移

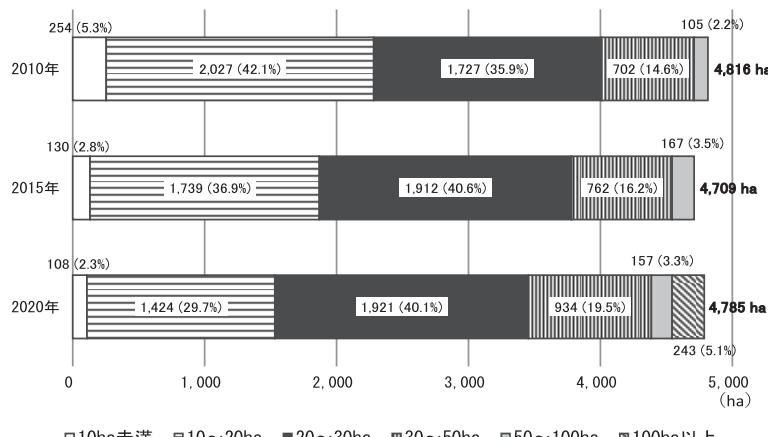
区分	2005年	2010年	2015年	2020年
農業経営体数（経営体）	323	275	247	223
5年前からの減少率（%）	-	▲14.9	▲10.2	▲9.7
経営耕地面積（ha）	4,830	4,816	4,709	4,785
うち田畠	4,745	4,723	4,456	4,115
畑	85	92	253	671
借入耕地面積	463	317	276	372
借入率（%）	9.6	6.6	5.9	7.8
1経営体当たり経営耕地面積（ha）（注1）	15.0	17.5	19.1	21.5
経営耕地面積規模別経営体数（経営体）				
5ha未満（注2）	24	18	18	13
5~10ha	58	28	12	10
10~20ha	177	134	112	89
20~30ha	51	73	80	80
30~50ha	11	20	22	27
50ha以上	2	2	3	4
総農家数（戸）	345	282	243	222
うち販売農家	323	274	243	221
自給的農家	22	8	-	1
基幹的農業従事者数（人）（注3）	812	732	636	534
65歳以上割合（%）	21.6	24.6	27.4	34.3
平均年齢（歳）	52.7	55.0	56.1	56.8

資料：農林水産省「農林業センサス」

注1：2010年以降の数値は、経営耕地を有する経営体の平均面積

2：「5ha未満」には経営耕地なしの経営体を含む

3：2005年から2015年までは販売農家、2020年は個人経営体



資料：農林水産省「農林業センサス」

一〇~二〇ha未満が最も多く八九経営体、次いで二〇~三〇ha未満が八〇経営体の順どなつてあり、平均経営規模近辺の一〇~三〇ha層に七六%

の経営体が占めている。またこの五年間で、経営体数の増減の分岐点が二〇haから三〇haに拡大する様相を呈している。同様に規模別の経営耕地

面積をみると、一〇~三〇ha未満の層が最も多く四割の経営耕地を占めている。一〇~二〇ha未満の層を加えると、

個人経営体の基幹的農業従事者に占める六五歳以上の割合は三四・三%で北海道平均と比べて六・六ポイント、石狩管

積している(図1)。

内平均と比べると一二・三ポイントも低く、高齢化は着実に進行しているものの、他地域に比べると若い従事者によって担われている。

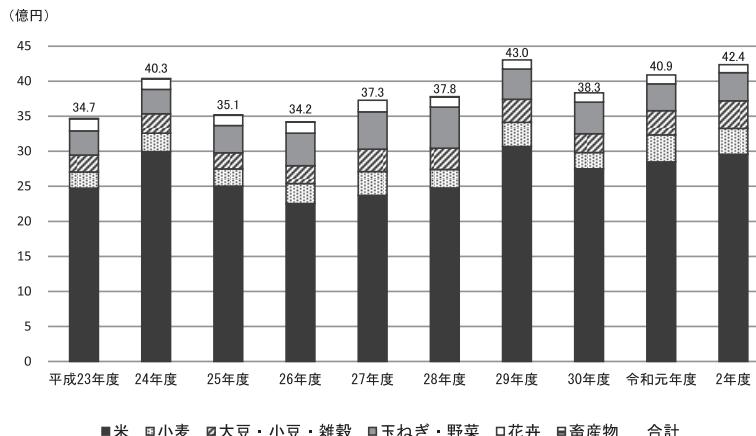


図2 JA新しのつの販売取扱高の推移

資料：JA新しのつディスクロージャー誌

J A新しのつ（以下、「JA」）の販売取扱高は近年四〇億円前後で推移しており、二〇一〇年度の取扱高は四二億円で、米が七割を占める（図2）。

JA新しのつは、JA新しのつ用型作物と野菜や花きを組み合わせた経営が営まれている。

JA新しのつ（以下、「JA」）の販売取扱高は近年四〇億円前後で推移しており、二〇一〇年度の取扱高は四二億円で、米が七割を占める（図2）。

JA新しのつ用型作物と野菜や花きを組み合わせた経営が営まれている。

クリーン農産物の生産が基本

新篠津村では有機農産物、特別栽培農産物、北のクリーン農産物をクリーン農産物と位置付け、その生産を推進してきた。一九九四年に役場やJAなどで「クリーン農業推進センター」（現在の「農業振興センター」）を設立し、土壤分析やボカシ肥の製造など土づくりを基本とした農業を進めってきた。「グリーンピュアクラブ」や「EM農法研究会」「オーガニック新篠津」など生産者による団体もこうした取り組みをリードしてきた。

また、タマネギ、軟白長ネギ、ピーマン、米の四つの生産者

団体が、北海道独自の認証制度である「YES! c-ea n」の登録団体になっている。

近年こうした取り組みは販路の拡大や販売価格の確保などに課題があり、なかなか伸びていないが、化学肥料・化學合成農薬の五割以上の削減が前提となる環境保全型農業直接支払交付金の実施状況をみると、一〇一〇年度は実施面積六六六ha（八九件）で、前年度より四〇ha以上増加しており、内訳はカバーフロップが一五五ha（四六件）、堆肥の施用が三四ha（六件）、有機農業二一ha（一〇件）、地域特認取組（フェロモントラップ）と耕種的防除を組み合わせたカメムシ防除技術）が四四五ha（五九件）であり、四千一

百万円余りの交付金が支払われている。村の四割ほどの農家がこの取り組みを行つており、多くの生産者にクリーン農産物の生産に対する意識が根付いている。

村では有機農業の取り組みについて、座学や栽培体験を通して理解してもらおうと、村外の消費者を対象に「有機農業塾」を開催している。

めざすは選ばれる 米産地

米の需給環境が厳しくなる中、JAでは米の作付けを維持しようと村とも連携し、他産地との差別化や米の販売拡大に努力している。



ライスファクトリー

国で初めてとなるライスファ

クトリー（乾燥調製施設）を

含めた米のグローバルGAP

の団体認証を取得した。JA

とともに新篠津村クリーン米

生産組合に所属する生産農家

二二人も認証を取得している。

一〇〇四年に青年部を中心

に設立した新篠津村クリーン

米生産組合は、道の「YESS-

c-e-a-n」登録集団となっ

たが、制度の全国的な知名度

が低く、そのメリットが見いだせずにいた。また、一〇一

八年産からは行政による生産

目標数量の配分廃止など国の

米政策の見直しがあり、米販

売の新たな展望を見いだす必

要があった。JAからの呼び

かけで、一〇一七年からグ

ローバルGAPの取得をめざ

し、組織体制の整備や視察・

学習会、各農場の整理や栽培

履歴、農薬散布などの書類整

理を行つてきた。JAでは基

準を満たすよう「ライスファク

トリー」の改修工事や、自ら作

成した品質管理マニュアルに

基づいて内部での検査や監査

は正確認を進めてきた。一一

年産は一七haで生産しており、

「YESS-c-e-a-n」認証

とセットで「安全・安心」の付加価値を高め、消費者に訴えていきたいとしている。

JAのGAP認証取得の取り組みに先駆けてJAでは米の

輸出に取り組んできた。一〇

一四年からニューヨークやパ

リに出店している国内のおに

ぎりローン店への輸出をス

タートし、現在では新たな輸

出先としてシンガポールも加

わり、年間一一〇tを輸出さ

れている。今後はシンガポール

での輸出拡大を見込んでおり、

三年後の一〇一四年には年間

四〇〇tの出荷をめざしてい

る。

JA独自ブランドの「新しのつ米」は、ネットやふるさと納税の返礼品などで販売が

増加傾向にあるなど、一定の

米を担当していない職員も含め拡大に向けて活動している。

新篠津村では基幹産業である農業を柱に、札幌圏に隣接する理事一名からなる「マイスマーケティングチーム」を設け、イベントの実施やパッケージデザインの考案など、販路

評価を受けている。JAでは「新しいつ米」の販売を伸ばそうと一〇一八年から、各部署の若手職員一二名と非常勤

で一人一人がアイデアを出し合いついで、販売推進の強化を図る考えである。

コロナ禍を越えて 都市や消費者との 交流を



考案したパッケージデザイン

する強みや美しい田園風景、しのつ湖や周辺の温泉施設、道の駅などの地域資源を活かして、都市と農村との交流を推進して関係人口の増加を図り、農業や地域社会の活力を向上しようとしている。

コロナ禍で交流事業を中止せざるを得ない中、新たな試みやコロナ禍を見

流星群を、一〇月には十三夜の月と秋の星座を、一一月には月食をメインに観測体験会を開催した。参加者は専門家の解説を聞き、肉眼の他、天体望遠鏡で星座や月を観察した。直前まで天気の悪かった三回目を除いて村の内外から一五〇名もの人が集まり、星空を堪能した。

物もなく、空を遮るものがない。そこで村はふれあい公園内にベンチと特注の大型星座早見盤を設置し、星座観測スポットとした。三六〇度見渡せる丸に“天然のプラネタリウム”である。

据えた取り組みが続けられている。

去年八月にはペルセウス座

の解説を聞き、肉眼の他、天体望遠鏡で星座や月を観察した。直前まで天気の悪かった三回目を除いて村の内外から一五〇名の人が集まり、星空を堪能した。

(1) 星空で交流

村の主要イベントである「青空まつり」などが中止になるなか、コロナ禍でも何かイベントができるかと企

画したのが「星座観測体験会」である。村内は平坦で高い建

村では一〇一年、道の駅

では、一〇一年、道の駅



しんしのつ産直市場

の隣に「しんしのつ産直市場」をオープンした。現在JAが運営しており、四月下旬から一月上旬までの間、季節の生鮮野菜や花、加工品などを販売している。本年度はオーブン一〇周年を迎えて、コロナの感染対策を講じつつ通常どおり営業した。札幌などから

のリピーター客も多く、年間の来場者数は五万一千人、売上総額は六、一〇〇万円で、JA前と遜色ない実績となつた。登録生産者は九〇人ほどおり、店内では顔写真付きで生産者を紹介している。

JJAの「もぎたて市」部会（部会員約三〇名）は朝収穫した野菜などを、村内のホクレンショッピング新篠津店の他、札幌市内のホクレンショッピングなど三店舗やホクレンくるの杜へ出荷している。今年度で一九年目になる。例年、六月から十月までは月に一度、部会員が札幌市内の店舗で対面販売を行い、消費者に野菜の説明や理調理方法などを説明し交流してきた。コロナ禍のため対面販売は自粛してい

る。

村外の販売フェアとして、札文島で漁協とタイアップし、新米の出回り時期に新米やハクサイ、ダイコン、タマネギなど旬の野菜をPR販売している。島民からも好評であり、今後も継続する考えである。

(3) 農業体験で交流

村やJAでは札幌市内の小学校の田植えや稻刈り体験等の受入れを積極的に行っていている。長く続けてきた受け入れもコロナ禍で作業体験が中止されているが、今後の継続に向けてつながりを保つ活動を続けている。

村では二〇〇六年から、西岡北小の児童に届けた。JA青年部では二〇〇四年から札苗北小学校（札幌市東区）を受け入れている。五年生を対象にJAの試験圃で、青年部員が「師匠」となって田植えや稻刈り体験などを行い、米作りや農業の大切さを伝えている。収穫した新米は、「師匠」が学校に出向き、「お米受け渡し会」を行って児童

「みのり交流農園」で田植えや稻刈り、脱穀などの作業体験を行い、米作りの大変さや食べ物の大切さを伝えている。精米した米は新篠津小の五年生が全員で西岡北小に届けていた。昨年秋の収穫体験は新篠津小だけで行い、村の教育委員会職員が精米した米を西岡北小の児童に届けた。

JJA青年部では二〇〇四年から札苗北小学校（札幌市東区）を受け入れている。五年生を対象にJAの試験圃で、青年部員が「師匠」となって田植えや稻刈り体験などを行い、米作りや農業の大切さを伝えている。収穫した新米は、「師匠」が学校に出向き、「お米受け渡し会」を行って児童

に手渡してきた。昨年は稻の

生育状況を記録した動画や責任部員のコメントを届けた。

る「グリーンツーリズム新篠津」(一〇一一年設立、会員一二四名、事務局：農業振興センター)では、関西の高校の修学旅行生の農業体験を受け入れている。空知地方などで

体験等の教育旅行を受け入れている「そうちロード」の加盟団体となり、連携して取り組んでいる。昨年一〇月下旬には一年ぶりに京都の高校生を受け入れ、日帰りの収穫作業体験を行った。例年であれば、年間一〇校程度、約一五〇人の修学旅行生を受け入れている。受け入れ農家の

モチベーション維持が心配さ

れるが、今後も継続する考えである。

村の人々が見慣れた平坦な田園風景や農家にとつては当たり前のことが、都会から来た人たちに想像以上に感動を与えていた。

取材後記

頼をしたのは昨年の一月。「…ちらもコロナ禍で取材を延期してきましたが、ようやく実現できました。コロナの収束が見通せない中、米の需給環境は一層厳しさを増してきた。村内の関係者からは、札幌圏の食糧供給基地としての誇りと稻作の何とか維持したいという強い思いを感じた取材となつた。

役場や農協の皆様には、取材の対応や資料、写真の提供など多くのご協力をいただき

一般社団法人
北海道地域農業研究所
特別研究員



むらの秋 豊かな稔り（手前は大豆、奥は水稲）と広い空

コロナ第五波の収束後 現地調査を精力的に実施中

(令和3年10月～12月)

■北海道農業公社委託事業に係る現地調査

(10月4日・13日・27日・28日・29日、11月10日・24日、

12月2～3日・8日・17日)

北海道農業公社から受託した研究課題について、現地調査を行いました。

■中央会委託事業に係る現地調査

(10月19日、11月22日、12月8日)

中央会から受託した研究課題について、現地調査を行いました。

■自主研究「コロナ禍を契機とした新しい生活様式の構築－農村からの提言」に係る現地調査等

(10月7日・11日、12月8日)

自主研究課題について、現地調査およびオンラインによるリモート調査を行いました。

■北農五連委託事業に係る現地調査

(10月15日・23日・30日、11月16日・18～19日・24～25日、

12月1日・2～3日・13日・15日・28日)

■ホクレン委託事業に係る中間報告

(10月22日)

ホクレンから受託した研究課題について、研究者から委託

者に対し中間報告を行いました。

推進するために開催するもので、会議の内容は今号の「研究所だより」に掲載しています。

■北農五連ＪＡ営農サポート協議会委託事業に係る現地調査

（10月25～26日、11月9～10日・15～16日、
12月3日・7日・21日）

北農五連ＪＡ営農サポート協議会から受託した研究課題について、現地調査を行いました。

■中央会委託事業に係る意見交換

（10月28日）

中央会から受託した研究課題について、委託者、関連研究機関および当研究所により意見交換を行いました。

■自主研究「持続可能な農村づくりにおける結婚支援事業に関する調査研究」に係るリモート調査（10月28日、12月28日）

自主研究課題について、オンラインによるリモート調査を行いました。

■モニター会議の開催

（11月17日）

農業者六名とＪＡ職員一名の計七名のモニターが出席し、オンラインによるモニター会議を開催しました。この会議は農業者の生の声を聞かせていただくことでタイムリーな地域の情報を収集して、情勢の変化に的確に対応した調査研究を行いました。

■北農五連ＪＡ営農サポート協議会委託事業に係る研究班会議

（11月24日）

北農五連ＪＡ営農サポート協議会から受託した研究課題について、研究者の同席により、今後のとりまとめ方向などについて、研究班会議を行いました。

■中央会委託事業に係る意見交換

（10月28日）

中央会から受託した研究課題について、委託者、関連研究機関および当研究所により意見交換を行いました。

■自主研究「コロナ禍を契機とした新しい生活様式の構築－農村からの提言」に係る研究班会議

（11月29日）

自主研究課題について、研究者同席により研究班会議を行いました。

■第4回理事会の開催

（11月30日）

令和二年度事業の実施状況と令和四年度の取組み（骨子）、令和二年度調査研究事業の実施状況等について付議し、全ての議案が承認されました。

■北海道農業公社委託事業に係る中間報告

（12月15日）

北海道農業公社から受託した研究課題について、研究者から委託者に対し中間報告を行いました。

■北農五連委託事業に係る研究班会議

(12月21日)

北農五連から受託した研究課題について、研究者の同席により、今後のとりまとめの方向などについて、研究班会議を行いました。



第4回理事会 (11.30)

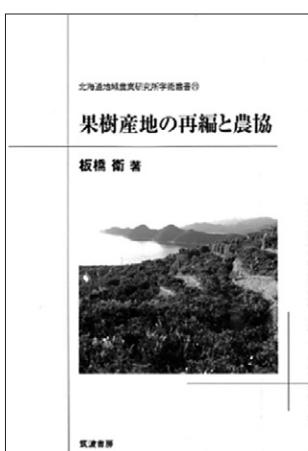
●出版助成事業対象書籍がJA研究賞受賞

J A全中が、JAとJAに関連する協同組合運動についての優れた著書や論文を表彰する「令和二年度JA研究賞」に、当研究所の出版助成事業対象書籍（令和元年度）が選定され、12月15日に授賞式が行われました。

著書名 『果樹産地の再編と農協』（筑波書房）
北海道地域農業研究所学術叢書⑯
著者 板橋 衛（愛媛大学大学院農学研究科 教授）

本書は、愛媛県内の果樹産地における専門農協と総合農協の合併による営農経済事業を中心とした経営資源の再配分の実態を分析し、果樹産地再編の構図を整理しつつ、専門農協化の限界を明らかにしている。

そのうえで、新たな合併農協が、総合農協としての経営資源を生かして、地域農業や地域社会の支援に発揮する機能についても示唆している。



研究会・研修会等への報告者・講師の派遣

<p>○「中央アジア地域農民組織強化コース」 主催 つーじー北道 とき 令和3年10月18日 テーマ 研修のポイント コース長 坂下 明彦 (研究所・所長)</p> <p>○「中央アジア地域農民組織強化コース」 主催 つーじー北道 とき 令和3年10月25日 テーマ アクションプラン作成指導 コース長 坂下 明彦 (研究所・所長)</p> <p>○「中央アジア地域農民組織強化コース」 主催 つーじー北道 とき 令和3年10月25日 テーマ 研修の振り返りと全般的な質疑応答 コース長 坂下 明彦 (研究所・所長)</p> <p>○「2021年度エクストラ・シート講座一ポールルームダンス(社交ダンス)の魅力を探る」(木ノハナ) 主催 横浜市立大学地域貢献センター とき 令和3年10月25日 テーマ スポーツ化・舞台作成化について・社交ダンスの可能性 表</p>	<p>○「中央アジア地域農民組織強化コース」 主催 つーじー北道 とき 令和3年10月27日 テーマ 報徳の教えと協同組合 講演 石田 健一 (研究所・専務理事)</p> <p>○「The 2nd International Symposium on Integrated Urban-Rural Development and Innovation of Social Governance in the New Era」(木ハナ) 主催 Huazhong Agricultural University (華中農業大學)</p>
<p>○「中央アジア地域農民組織強化コース」 主催 つーじー北道 とき 令和3年10月20日 テーマ 農業協同組合論 コース長 坂下 明彦 (研究所・所長)</p> <p>○「中央アジア地域農民組織強化コース」 主催 つーじー北道 とき 令和3年10月20日 テーマ 農業協同組合論 コース長 坂下 明彦 (研究所・所長)</p>	<p>○「中央アジア地域農民組織強化コース」 主催 つーじー北道 とき 令和3年10月27日 テーマ 研修の振り返りと全般的な質疑応答 コース長 坂下 明彦 (研究所・所長)</p>

<p>○ 「令和2年度JA研究奨励 助成対象者報告会」（オンライン）</p> <p>トーラ Sustainable Regional development</p> <p>through municipal matchmaking in Hokkaido, Japan</p> <p>（田舎体によね結婚支援を通した持続可能な地域づくりの取組みー日本の北海道を事例）</p> <p>講演 井上淳生 (JA研究所・専任研究員)</p>	<p>○ 「令和3年度「第52期生」人事異動（1月14日付）</p> <p>主催 日本協同組合連携機構 (つこA)</p> <p>とき 令和3年12月28日</p> <p>テーマ 持続可能な農村づくりにおける結婚支援事業の意義</p> <p>講演 井上淳生 (JA研究所・専任研究員)</p>
<p>○ 「令和3年度「第52期生」人事異動（1月14日付）</p> <p>報徳講義（後期）</p> <p>主催 JAカレッジ</p> <p>とき 令和3年12月9日</p> <p>テーマ 協同組合と報徳</p> <p>講演 石田 健一 (当研究所・常務理事)</p>	<p>人事異動（1月14日付）</p> <p>△退職▽ △昇進▽</p> <p>事務局長 片岡省一 事務局長（研究部長兼務） 及川敏之 (前研究部長)</p>

令和3年度 農業総合研修会オンライン開催のお知らせ

研修テーマ：日本と北海道の食はエシカルを目指す

講 師：株式会社グットテーブルズ

代表取締役社長 山本 謙治 氏

開催日時：令和4年2月15日(火) 13時30分～14時40分

開催方法：オンライン研修会（ズームでのリモート研修）

別途、参加申し込み受付し、申し込みEメール宛に配信

要領を案内します。

参 加 料：無料

問い合わせ：一般社団法人北海道地域農業研究所

電 話：011-757-0022

ファックス：011-757-3111

E-Mail:office47@chiikinouken.or.jp

後記 編集

◆コロナという単語だけでビクッとしていたが、この二年の間、毎日聞いているうちにすっかりただのニュース感覚となり、全く慣れとは恐ろしいものである。それほどまでにウイズコロナとなってしまった。年が明け本年は寅年である。一年前の子年の初頭からねずみで、家庭内でちょっと贅沢な食

◆ななかなか外出もできないので、お寿司が並ぶことに、関東や北海道では、大晦日に新

事を囲み、プチ外食気分を味わうスタイルが増えているようだ。お祝い事などの「ご馳走は外食」というのが一般化して長い年に溢れる年とも言われている。これまでの閉塞感を振り払く姿を期待したい。

ご馳走といえば、北海道の大晦日は、年越しそばに加え和洋中盛り込んだ豪勢なオードブルが変わることがあっても、この北海道スタイルともいえる大晦日の「ご馳走風景は残し続けたい

DATA FILE

関連事項／DATA

一般社団法人 農業開発研修センター
〒601-8585
京都市南区東 9 条西山王町 1
☎ 075 (748) 0703

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
北方建築総合研究所
〒078-8801
旭川市緑が丘東 1 条 3 丁目 1-20
☎ 0166 (66) 4211

北海道大学大学院農学研究院
〒060-8589
札幌市北区北 9 条西 9 丁目
☎ 011 (716) 2111 (代表)

北海道新十津川農業高等学校
〒073-1103
樺戸郡新十津川町字中央13番地
☎ 0125 (76) 2621

新篠津村役場
〒068-1192
石狩郡新篠津村第47線北13番地
☎ 0126 (57) 2111

新篠津村農業協同組合
〒068-1193
石狩郡新篠津村第47線北13番地
☎ 0126 (57) 2311

一般社団法人 北海道地域農業研究所
〒060-0806
札幌市北区北 6 条西 1 丁目 4 番地 2
☎ 011 (757) 0022
Fax 011 (757) 3111
HP : <https://www.chiikinouken.or.jp>
E-mail : office47@chiikinouken.or.jp

関西出身の方からとてもびっくりされたものだ。ずいぶん不思議がられ、そしてうらやましがられたが、北海道のほとんどの人にとって、年越しそばと普通の食事だけで過ごす大晦日こそ想像できない景色であろう。北海道では、大晦日に新年を迎える「年取り膳」を食べる風習が残ったことが由来のようである。どのように生活様式が変わることがあっても、この北海道スタイルともいえる大晦日の「ご馳走風景は残し続けたい」ものである。

読者アンケートのお願い

皆さんのお役に立つ誌面づくりのために、是非皆さんのお声をお寄せください。
お送りいただいたご意見は、誌面作りに反映させていただきます。

お送り先 = FAX 011-757-3111

記入者のご職業 1. 農業者 2. JA 3. 市町村 4. 農業関係団体
5. 農業関係企業 6. 研究者 7. その他 ()

《アンケート回答書》 下記の質問にお答えください。

Q1. 今回の誌面で興味深かった内容はどれですか？ ※複数回答可

- 0. 表紙
- 1. 観察(みる) 時間どろぼうの話
- 2. 特集 北海道内の農業金融の特徴と展望 -「開発型」農協のゆくえ-
- 3. レポート 持続可能な農村集落の維持・向上と新たな産業振興に向けた対策手法の確立
- 4. 研究報告 地産地消延長型マーケティング論序説
- 5. シリーズ いきいき農業高校 第15回 北海道新十津川農業高等学校
- 6. Essay 収穫・仕込みを終え、残るは剪定
- 7. 研究所だより モニター会議概要
- 8. わがマチの自慢 №27 新篠津村
- 9. 地域農研NOW
- 10. DATA FILE

Q2. 今号の満足度をお答えください。

満足 やや満足 普通 やや不満 不満

Q3. 「地域と農業」を読む頻度をお答えください。

毎号読んでいる ほとんど読んでいる たまに読んでいる ほとんど読まない

Q4. 今後、「地域と農業」に取り上げてほしい内容をご記入ください。

Q5. 「地域と農業」に関するご意見・ご感想・改善点などをご記入ください。

Q6. 今後、北海道地域農業研究所で調査研究に取組んでほしいテーマをご記入ください。

Q7. 北海道地域農業研究所に関するご意見・ご感想・改善点をご記入ください。

**Meat
Packer
Incorporation**

安全・安心な食肉を
真心こめて
全道5工場から
全国の皆様へ
お届けします。



株式会社 北海道畜産公社

代表取締役社長 岡本 安司

本社 〒060-0004 札幌市中央区北4条西1丁目1番地 共済ビル3階
TEL (011) 242-4129 FAX (011) 242-2929



株式会社 ホクレン商事

代表取締役社長 石崎 裕

本 社

〒060-8550

札幌市北区北7条西1丁目2-6

TEL 011-756-3211(代) FAX 011-709-5640



異国のキッチンで、日本の地名が聞こえた。

聞きなれぬ言葉、見しらぬ料理。
遠く離れた異国の食卓で、

ふと、日本の地名が聞こえた。

私たちに馴染み深い

日本の畑で生まれた野菜や果物が、
今、世界で人気なんだとか。

肥沃な土壤で、手間暇かけて育てた
おいしさに国境はありません。

輸出経路の確保、組織の連携、
そしてたくさんの作物を、

高水準にそろえてつくれる技術力。

様々なハードルを越えたその味は、
海をも越えて笑顔を実らせ、

やがて生産地である地域の根を
つよくしていきます。

私たちの農業には、

まだまだ面白い世界が広がっている。

J A バンクはこれからも、

この国の農業に関わるすべての人と、

地域を支え続けます。

それが、明日の農業の力になるから。

農業 Loves you.

地域の未来をつくる。

JAバンク
耕そう、大地と地域のみらい。